聖徒の道　1975年2月20日発行（毎月1回20日発行）　第19巻第2号
昭和42年12月18日第三種郵便物認可

# 聖徒の道

2　1975

1975　2月号

末日聖徒イエス・キリスト教会

**大管長会**

スペンサー・W・キンボール
N・エルドン・タナー
マリオン・G・ロムニー

**十二使徒評議員会**

エズラ・タフト・ベンソン
マーク・E・ピーターセン
デルバート・L・ステイプレー
リグランド・リチャーズ
ヒュー・B・ブラウン
ハワード・W・ハンター
ゴードン・B・ヒンクレー
トーマス・S・モンソン
ボイド・K・パッカー
マービン・J・アシュトン
ブルース・R・マッコンキー
L・トム・ペリー

**諮問委員会**

J・トーマス・ファイアンズ
（内務伝達部長）
ジョン・E・カー
（配送翻訳部長）
ドイル・L・グリーン
（教会誌編集主幹）
ダニエル・H・ラドロウ
（教会教課企画調整主任）

**統一誌編集主幹**

ラリー・ヒラー

**日本語コーディネーター**

八木沼　修　一

# もくじ

正しく尊い目的……49……スペンサー・W・キンボール

手……52……ルーサン・ボイヤー・ランドール

ロレン・C・ダン長老との会見……53

いかにして隣人に福音を分ち合うか……56……アーネスト・エバーハード

殉教を証する少年……61……ゴールデン・R・ブキャナン

予言者と伝道……62

テマラマのいちばんうれしい日……69……ドイル・L・グリーン

ウシガエルのブーマー……71……ダウン・アセイ

マリアのかいしゅう……74……ミルドレッド・J・ウイマー

おもちゃばこ……76

質疑応答……77

神は欺かれず……78……スペンサー・W・キンボール

わが子よ、今宵なぜさまようのか……84……N・エルドン・タナー

人はいかにして救われるか……87……マリオン・G・ロムニー

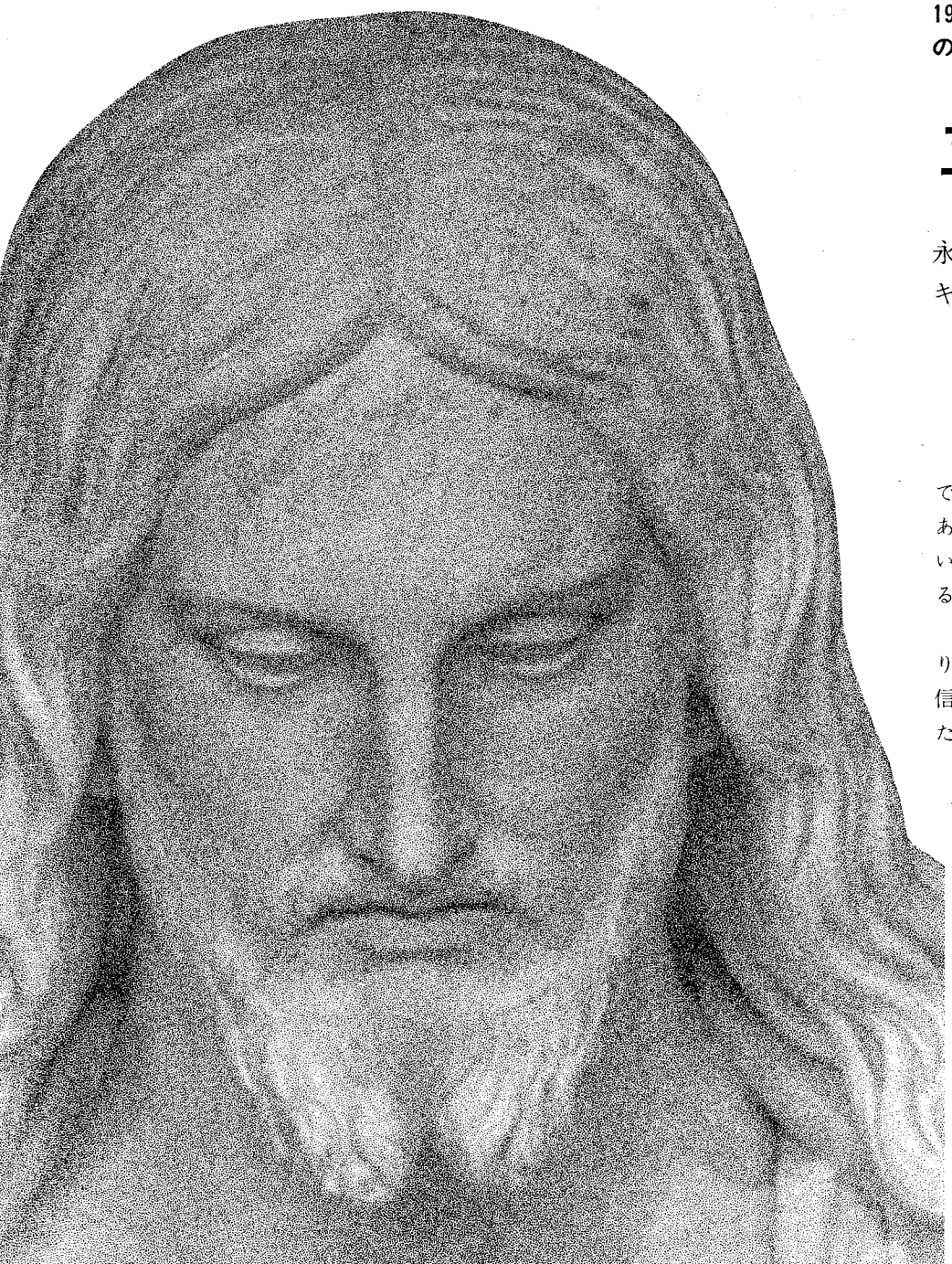
落胆してはいけない……90……エズラ・タフト・ベンソン

ローカルニュース……94

**聖徒の道2月号**

発行所　末日聖徒イエス・キリスト教会
東京都港区南麻布5－8－10
配　送　東京ディストリビューション・センター
東京都港区南麻布5－10－25
定　価　年間予約1,700円　1部 150円
海外予約2,200円

INTERNATIONAL MAGAZINES Printed in Japan



1974年4月7日、総大会日曜日午後の部

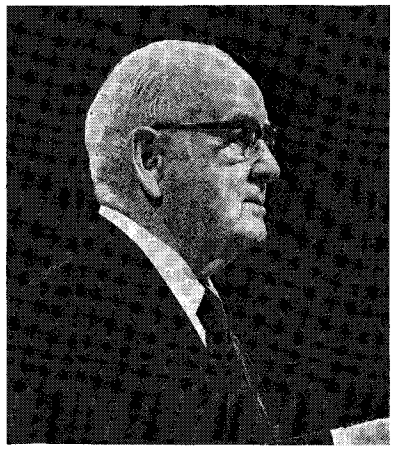
# 正しく尊い目的

永遠の生命への道は、イエス・キリストを通じて見出される。

大管長
スペンサー・W・キンボール

何かを行なう場合、どのような方法で行なうかということはとても大切である。しかし、何のために行なうかということの方が、それ以上に大切である。

私たちは主に仕えようと決意しており、その目的が正しく、尊いことを確信している。しかし何にもまして、私たちには、神が現在天に住んでおられ、



また神の御子イエス・キリストが私たちにひとつの計画を与えて下さったという知識がある。この主の計画によって、私たちと愛する者たちは、忠実であれば永遠の生命を授かるのである。この永遠の生活は、達成と喜びと発展に満ちた、多忙な、目的のある生活であろう。

あなた方は、この世においてこれまでに味わった喜びの中から最も大きなものを思い出せると思う。ところが次の世の生活はこの世の生活の延長であり、この世に増して大きく、倍加された、しかももっと望ましい意味の深い事柄を伴うのである。この世の交わりすべてを通じて、あなた方は進歩と喜びと成長と幸福を得ている。しかしこの世の生涯を閉じた後私たちの状態は、現世に似たものとなる。ただ現世と異なる点は、制限が少なく、もっと光栄ある、大きな喜びがあるということである。

ジョン・ヘンリー・ジョウェットはこう語っている。「祭壇を築くことはだれにでもできる。だが、火を呼びおこすためには神が必要である。家を築くこともだれにでもできる。だが、家庭をつくるためには主〔と両親〕が必要である。」（『家庭における神』、ジョン・ヘンリー・ジョウェット、A Treasury of Inspiration「インスピレーションの宝」、ラルフ・L・ウッズ編、P.260）

あなたがたがこれまでにたびたび耳にしてきた教会のこの基本プログラムは、家庭を本来の目的を果たせる場とするものであり、家族に霊感と啓示を与えるものである。自分自身の思いつきと能力にのみ頼って物事を決める人は、非常に重大な過ちを犯すことになり、その影響ははかり知れない。

ある人が言っているように、「多くの人々は、学齢に達してから博士号を得るまで、16年ないし20年間、こつこつと勉強を続ける。そして医学や工学、心理学、数学、社会学、生物学などを学ぶ。そのために研究や調査を重ね、クラスに出席し、授業料を払い、教師や教授の助けを受ける。ところが、万物の造り主であり、すべてのものの創造者である神について学ぶときには、祈りも怠りがちで、研究する時間もきわめて限られる。にもかかわらず、神についての真理を見出すことができると考えているのである。」

主が私たちに、聖典を調べ、祈るように命じられたのはこの理由による。主は言われた。「聖典を調べなさい。というのは、あなたがたは、聖典の中に永遠の命があると思っているからである。聖典は、わたしについてあかしをするものである。」（欽定訳ヨハネ5：39）また主は言っておられる。「ああ、愚かで心のにぶいため、預言者たちが説いたすべての事を信じられない者たちよ。キリストは必ず、これらの苦難を受けて、その栄光に入るはずではなかったのか。」（ルカ24：25、26）

パウロはコリント人に次のような印象深い言葉を書き送っている。「兄弟たちよ。わたしもまた、あなたがたの所に行ったとき、神のあかしを宣べ伝えるのに、すぐれた言葉や知恵を用いなかった。

なぜなら、わたしはイエス・キリスト、しかも十字架につけられたキリスト以外のことは、あなたがたの間では何も知るまいと、決心したからである。

わたしがあなたがたの所に行った時には、弱くかつ恐れ、ひどく不安であった。

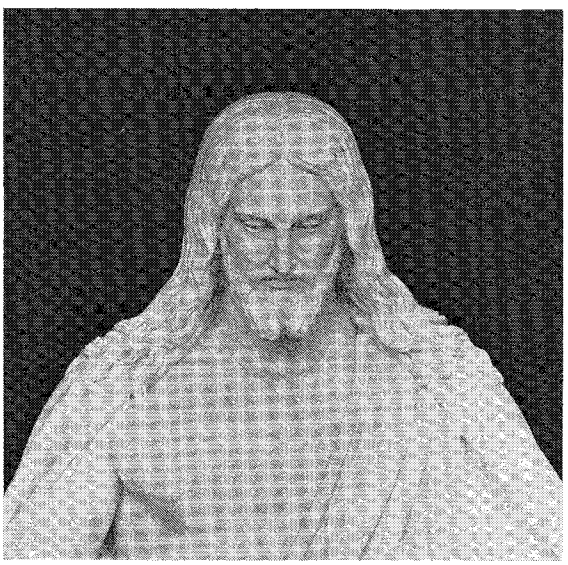
そして、わたしの言葉もわたしの宣教も、巧みな知恵の言葉によらないで、霊と力との証明によったのである。

それは、あなたがたの信仰が人の知恵によらないで、神の力によるものとなるためであった。

しかしわたしたちは、円熟している者の間では、知恵を語る。この知恵は、この世の者の知恵ではなく、この世の滅び行く支配者たちの知恵でもない。

いったい、人間の思いは、その内にある人間の霊以外に、だれが知っていようか。それと同じように神の思いも、神の御霊以外には、知るものはない。」（Ⅰコリント2：1－6，11）

またパウロはこう続けている。「と



ころが、わたしたちが受けたのは、この世の霊ではなく、神からの霊である。それによって、神から賜わった恵みを悟るためである。

この賜物について語るにも、わたしたちは人間の知恵が教える言葉を用いないで、御霊の教える言葉を用い、霊によって霊のことを解釈するのである。

生れながらの人は、神の御霊の賜物を受けいれない。それは彼には愚かなものだからである。また、御霊によって判断されるべきであるから、彼はそれを理解することができない。」（Ⅰコリント2：12−14）

ヨブは語っている。「しかし人のうちには霊があり、全能者の息が人に悟りを与える。」（ヨブ32：8）

「百卒長、および彼と一緒にイエスの番をしていた人々は、地震や、いろいろのできごとを見て非常に恐れ、『まことに、この人は神の子であった』と言った。」（マタイ27：54）

ある時、ふたりの人が列車で旅をしながらキリストのすばらしい生涯について話し合っていた。そのうちのひとりが言った。「イエス・キリストについて扱ったら、興味深い物語が書けると思いますね。」

するともうひとりが答えた。「それを書けるのはあなただけですよ。イエスの生涯と性格をそのまま描き出したらいかがですか。イエス・キリストは神であるという一般の観念を破って、人間臭い人間としてありのままに描くんですよ。」

この話は実行に移され、物語が書き上げられた。提言した人はインジャーソール大佐で、著者はルー・ウォーレス、その著書は「ベン・ハー」であった。

物語の筋を組み立てる過程で、彼が見出したのは、イエスが罪とは無縁のお方だということであった。その生涯と性格を調べれば調べるほど、イエスはただの人間以上のお方であるという確信が深まってくるのだった。そして最後に、十字架の下の百卒長のように、彼も「まことに、この人は神の子であった」と叫ばずにはいられなくなったのである。

私が以前考えたことも感じたこともない事柄を、主は夢を通して人々に明らかにしてこられた。ジョージ・F・リチャーズが会長のときに、十二使徒評議員会の席上で、私は一度ならずこのことを聞いた。リグランド・リチャーズ兄弟の尊父であるリチャーズ会長はこのように語った。「兄弟たち、私は夢を信じている。主は私に幾度も夢を見せて下さった。それは私にとって、あたかも現実のようであった。また、国を飢饉から救う手段となったパロの夢や、故国から一行を率いて大海を渡り、この約束の地へ来るよう告げたリーハイの夢や、その他聖典に記された数々の夢のように、私の夢も神からのものだった。

私たちが大切な夢を見るにふさわしくないということではない。40年以上前に私はある夢を見たが、それは主からのものであると私は確信している。私はこの夢の中で、中空に立っておられる救い主のみ前にいた。私は主から何の言葉も受けなかったが、主に対する私の愛は、筆舌に尽くせないほどであった。この世の人はだれも、神が示しを与えたまわない限り、私が救い主に対して感じたような愛を主に抱くことはできないことを私は承知している。私はそのまま主のみ前にとどまりたかった。けれども、ある力によって私は主から引き離された。

その夢を見た結果、私は、何が求められようと、福音が私に何を求めようと、私に求められるものはたとえ命でも差し出そうという気持に駆られた。

また、『わたしの父の家には、すまいがたくさんある。……あなたがたのために、場所を用意しに行く……わたしのおる所にあなたがたもおらせるためである』（ヨハネ14：2，3）と救い主が弟子たちに言われたが、その言葉を聖典で読んだときにもそうであった。そこが私のいたいと望んでいた場所なのだと思う。

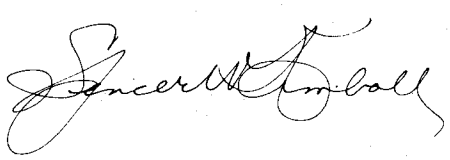
救い主と一緒にいることができ、あの夢の中で味わった同じ愛の気持を抱けるならば、それこそが私の存在の目標であり、生涯の望みなのである。」

ジョージ・Q・キャノン長老は、一時教会の大管長会で働いた人であるが、彼はこのように語っている。「私は神が生きておられることを知っている。またイエスが生きておられることも知っている。私は現に主にまみえたからである。これは神の教会であり、私たちの贖い主であるイエス・キリストの上に築かれていることを知っている。私は事実を知っている者として、主イエス・キリストの使徒としてあなた方に証する。今日、主のみ前にあってあなた方に証することができる。主は現在も将来にわたっても生き続けたもう。また主は争う者のない統治者として地上に来られ、世界を治められるであろう。」（1896年10月総大会の説教。The Deseret Weekly「ザ・デゼレト・ウイークリー」1896年10月31日、第53巻、P.610）

兄弟姉妹たち、教会幹部はこれと同じ証をもっている。そしてそれが真実であることを知っている。彼らは、天父から遣わされた真の僕なのである。

兄弟姉妹たち、私はこれらの予言者たちの証に私の証を加えたい。私は主が生きておられることを知っている。また、主にまみえることができ、主と共にいることができることを知っている。主の戒めを守って生活し、主に命じられ、幹部の兄弟たちに促された事柄を行なうならば、私たちはいつも主のみそばにとどまることができるであろう。

私はあなた方にこの証を残す。主イエス・キリストのみ名によって、アーメン。



# 手

ルーサン・ボイヤー・ランドール

幼ない頃、私は父と手をつないで散歩するのが好きでした。大きくてたくましく、あたたかい父の手、小さな私の手をすっぽりと包みこんでしまいそうでした。父はお百姓でした。私は父の手を見るといつも、なぜ父はあのようにたびたび爪を切るのかしら、そして時々、深爪になるくらいに短く切ってしまうのはなぜかしらと不思議に思っていました。でも、一度だってそのわけを尋ねたことはありません。ただしっかりと父の手につかまって、父について行きました。

やがて成長し、私は十代を迎えました。祖母と一緒にいたとき、一度祖母の手をじっと見つめたことがあります。血管が浮き出て、大きく節くれだったしわだらけの手でした。皮膚はやつれて、右手のこぶしは左手のそれよりも大きくなっていました。しかし私は祖母と話したとき、手のことについては何も触れませんでした。そのとき私はほかのことで頭が一杯だったのです。母の手を見つめることも滅多にありませんでした。

時がたち、私は結婚しました。私は今でも夫の手をよくとりますが、その柔らかなぬくもりの中に、私はいつも夫の愛と理解ある導きを感じてきました。

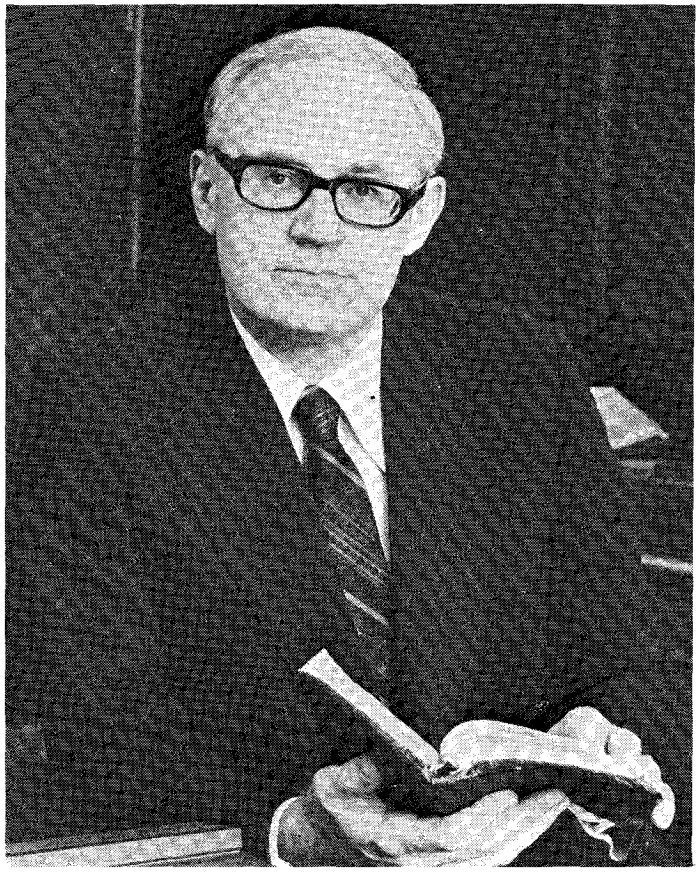
今や、私の手にもしわが目立つようになりました。神様の贈物——小さなかわいい赤ちゃんの手、そんな手をしていた私の手にも赤ちゃんの世話に始まって、歳月と共にいつしかしわが刻みこまれてきました。病気のときも健康のときも、成長する子供たちの世話をしてきたその歳月が、手のしわとなって表われているのです。柔らかな手、すべすべした手、泥んこまみれの手、うるおいのある手、きれいな手、かわいい手、よく働く手、きゃしゃな手、元気のよい手、よくお手伝いをする手、これが子供たちの手です。

今、私は、血管が浮き出て大きく節くれだった、しわだらけの手をしています。右手のこぶしは左手のそれよりも大きく、膚はやつれて荒れています。自分の手を祖母や母の手に置き換えて見ると、私たちの手は皆同じようなものだということがわかります。そしてお互いに、どうしてこんなにしわだらけになったのかしらと尋ね合うことはないのです。ただ、それは時が一番よく教えてくれるのだとわかって、ほほ笑むだけでしょう。

月日が流れ、私たちは至上の愛と犠牲の刻みこまれた救い主のみ手を仰ぐ時を迎えます。釘あとの残るその聖なるみ手を差し伸べて、救い主はやさしく私たちの手に触れられるのです。もし私たちがその高貴なみ手にふさわしくあるのなら。

# 七十人最高評議員会会員

# ロレン・C・ダン長老との会見



**記者**：キンボール大管長が十二使徒会地区代表に述べられた最近の説教（「聖徒の道」1974年11月号）の中で、伝道プログラムをさらに拡大する必要があることを強調しておられたようですが、現在の伝道の状況を一言説明していただけませんでしょうか。

**ダン長老**：現在、111の伝道部で約1万8千人の宣教師が伝道していますし、またその数もここ2、3年、増加の傾向をたどっています。キンボール大管長は、私たちが将来何をなすべきかということについて指針を与えて下さいました。つまり各伝道地で働く宣教師の数を絶えず増やしていくということです。また大管長は、宣教師の数を増やすということで5万5千人というチャレンジを与えられましたが、これは資格ある若者が各地域で伝道に召されるようになれば、不可能な数字ではないと思います。

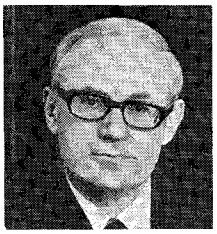
**記者**：そのことは世界中のいろいろな伝道地域に住む人々に何か特別の意味を含んでいるようですが。

**ダン長老**：教義と聖約の中に、人々は己が国語と己が言葉にて福音を聞くであろうとあります。このことを実現する最も効果的な方法は各々の国で自分たちの宣教師を賄うことです。つまり、サモア人を教えるにはサモア人が、メキシコ人にはメキシコ人が、日本人には日本人が教えればいい訳です。その国に生まれ、よく訓練された宣教師ならば、人々は共通の立場に立って考えることができますから、一般的に以前よりも大きな成功を収めることができると思います。

私たちの強調する点は、母国語で福音を教えることのできる宣教師を増やしていくことです。

**記者**：全世界の聖徒たちがより多くこの伝道の召しにあずかれるようにするために、何か行なっていることがありましたらお話し下さい。

**ダン長老**：モデルケースとして、まずメキシコで着手したのですが、メキシコ人の聖徒の中から年に4回まとめて宣教師を召すというものです。神権指導者にはその時期が通



## ロレン・C・ダン長老との会見

知されることになっています。もちろん召された宣教師はメキシコで伝道します。なぜなら、共通の文化の中で育ってきている人々に教えることが最も自然だからです。宣教師を申請があり次第、時期に関係なく召す代わりに、1年に4回に分けて召すことによって、各伝道部長は、ソルトレーク・シティーの伝道本部で宣教師に配布された教材を十分に使ってオリエンテーションを定期的に行なうことができるわけです。

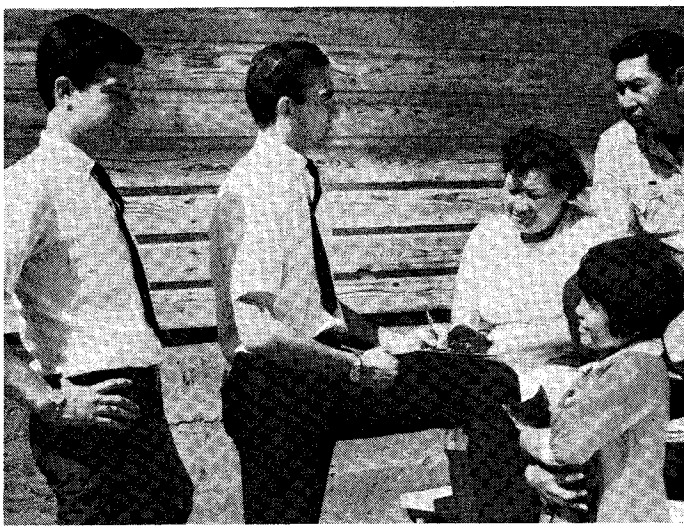
次にこのプログラムにはもうひとつ利点があります。それは1年の内4、5回、特定の時期に宣教師が召されることにより、宣教師になる予定の人をその時期に合わせて準備させる必要があることを地元の神権指導者が悟るようになるということです。このプログラムが世界の他の地域に紹介される日も間近いと思います。

もちろん、私たちは絶えず、地元出身の専任宣教師を増やしていくつもりです。伝道事業が停滞したひとつの理由は、若い青年を伝道に出すことが急務であることを感じていない地域があったからです。しかし事態は変わりつつあります。教会の本部に近いあるステーキ部では、すべての肉体的、精神的に欠陥のない、ふさわしい少年たちに、若いときから貯蓄をし、伝道に備えるように励ますのが神権指導者や家族の人々の責任になってきています。この伝道は教会のすべての地域で強調されるべきです。

**記者**：では、自分自身で十分に伝道費用を賄えない人々はどのようにすべきですか。

**ダン長老**：よく計画すれば、伝道費用の全額かまたはその大部分を貯めることができます。個人で最善の努力をし、さらに家族や地元の神権指導者ができる限りの援助をしたところで、不足分を補うために教会の伝道資金を使います。従って伝道の費用をすべて支払うということは決してしません。これは宣教師に可能な限りの援助がなされた上で最後に考慮されるべきものだからです。

現在、専任宣教師として働けない人もたくさんいます。しかし、彼らとて偉大な貢献をすることができます。つまり、1カ月に30時間ないし40時間程度、ステーキ部や地方部の宣教師として召され、貴重な貢献をするだけでなく、同時に将来の専任宣教師としての奉仕の業に備えることもできるのです。



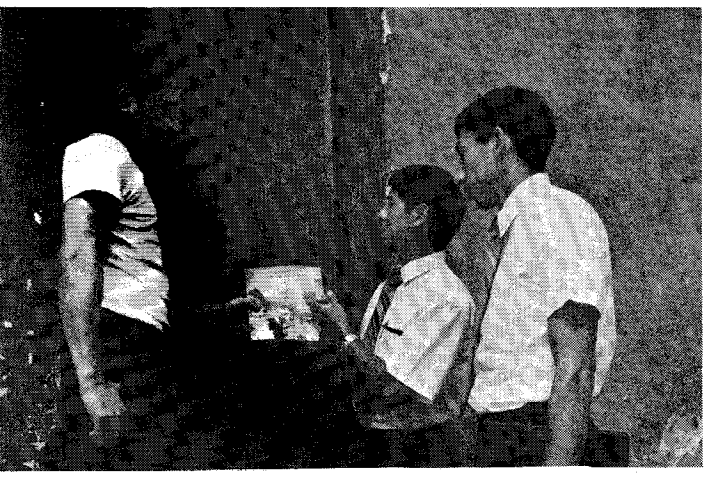
**記者**：伝道資金を増やし、伝道精神の高揚を図る上で、ワード部や支部でできることがもっとないものでしょうか。

**ダン長老**：私は地元のユニットでもっとできると思います。そして、人々がキンボール大管長の勧告をよく理解すれば、若人をより多く伝道に出すよう奨励するはずです。大抵の所では、宣教師とはアメリカ西部から来る人たちであって、地元の若い聖徒たちには余り関係がないといった雰囲気があります。会員たちはアメリカやカナダから来て言葉もよく話せず、文化も十分に理解できない宣教師よりも、自分たちの方がもっと人々を援助できるのだということをあまり自覚していないようです。地元の聖徒たちは文化習慣をよく理解していますし、言葉も話せます。私たちは、彼らが将来の宣教師として想像している以上に多くの有利な条件を備えているということを認識してもらいたいと思います。

**記者**：宣教師になる義務という点についてはいかがでしょうか。

**ダン長老**：この問題に関しては、キンボール大管長が最も適格な解答を出して下さっていると思います。彼はすべての若人は伝道に行くべきかという質問に対して、はっきりと肯定の答を出しています。私はすべてのバプテスマを受けた若い兄弟が、またすべての神権者が、キンボール大管長が生ける予言者であり、彼こそ主が私たちに今何を望んでおられるかを告げる人であるということを心に留めるべきだと思います。福音を宣べ伝えよという戒めは、聖典の中にも教会の他の大管長の教えの中にも数多く見いだすことができます。しかし最も新しくかつ重大な勧告は現在生ける予言者が与えるものをおいて他にありません。

キンボール大管長は何らかの困難のために伝道にも出れず、その資格も得られない人にも、他の責任が与えられ、教会で奉仕する機会に恵まれるはずだと言っています。



長い間、キンボール大管長は12歳以上の若者に、またそれ以下の人にも、伝道について考え、計画し、貯蓄をするように勧めてきました。もし私たちが教会の指示通りに適切に教え、定期的に面接を行なうなら、若い人は、召しがあったときにはもう資格を十分に備え、伝道に出ることができるようになっているはずです。

もし人がバプテスマの誓約のときに、主と、あるいは教会と交わした約束を、また神権を授かったときに共に与えられた義務を十分に理解するならば、主に仕え、世の中を堅固にし、人々に幸福と喜びをもたらすために自分のできる最良のことは、宣教師として奉仕することだということがわかると思うのです。

今日、世の中には、社会問題の解決に奉仕したいと望んでいる若者が大勢います。まあ、そのこと自体はいいことですし、若い人々が参加できる奉仕活動や博愛主義的な組織も多々あります。しかし若人は暗闇の中をさ迷っている人々に救いについて、つまり現実に生きたもう神のみ前に帰るために何が必要かについて自分でも教えることができるのだということを覚ったとき、自分が最も貢献できるのはこの仕事をおいて他にないことに気づくのです。

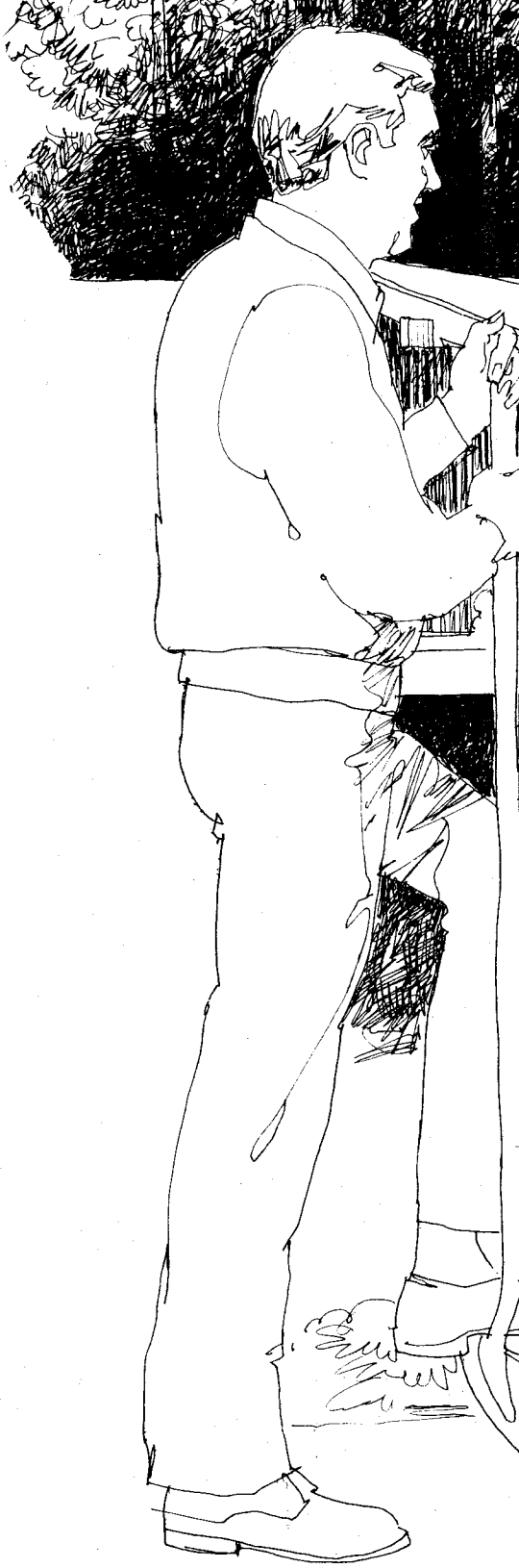
宣教師の働きが人を福音の光のもとへ導くならば、それは永遠に亘るものとなりますが、反対に、世の中の社会運動は余り継続するものではありません。あなたがある人にイエス・キリストの福音を説き、改宗に導いたときは、あなたはその人の人生を変えたことになります。またあなたは昇栄の希望を与えただけではありません。もしその人が福音に生きるならば、あなたはその人を良き市民に成長させたことになりますし、また様々な面でその人を向上させたということにもなるわけです。

**記者**：では最後に、姉妹宣教師はもっと必要だとお思いですか。

**ダン長老**：ふさわしい姉妹宣教師はある程度必要ですが、そんなに多くというわけではありません。多分、結婚の予定のある姉妹は結婚するように勧めるべきです。なぜなら若い女性には、男性が持っているような伝道の責任がないからです。伝道は神権者の務めであり、神権者がその務めを果たすということに重点が置かれるべきです。

若人は、中学校に入る年齢に達したら、伝道に出るための霊的、経済的な準備ということに関心を抱くようにしなければなりません。そしてふさわしく、また情緒的にも肉体的にも伝道の厳しさに耐えられるようであれば、必ず伝道に出るべきです。以上のことから、肉体的、精神的に欠陥のない、ふさわしい青年は、地元の神権指導者の推薦と教会の大管長を通して行なわれる主の召しがあり次第、喜んで伝道の業に奉仕しなければならないのです。

# いかにして隣人に福音を分ち合うか



オレゴン伝道部長
アーネスト・エバーハード

「すべての教会員は宣教師である。」私たちはこの言葉を何回となく耳にしてきました。

デビッド・O・マッケイ大管長はかつて、教会員は毎年少なくともひとりの人を教会に連れて来るべきであると強調されました。それ以来、教会員の多くは隣人への伝道について考えてきました。しかし実際には何も行なわれていないのです。恐らく「どのようにしたらよいかわからなかった」からではないでしょうか。

しかし「その方法を知る」のは何もむずかしいことではありません。ごく簡単な普通の方法で福音を分ち合うことができるのです。何度か実際に行なってみれば自分にもできるという自信が持てるようになり、主が託された宣教師という任務に従うことができるのです。

よく考え、信仰を持って以下のステップを実践すれば、皆さんの友人は福音に耳を傾ける準備ができるでしょう。この伝道の仕事を家族ぐるみで行なってみてはどうでしょうか。

## 一般的な心得

A.各ステップを計画する。もちろん伝道の機会は計画通りにやって来るものではありませんが、どのようなステップを踏んで行なっていくかということについては、あらかじめ計画を立て、できれば練習を積んでおくべきです。次の案は必要に応じて順序を変更することができます。友人の態度や求めているものによって変化を持たせ、追加したり削除したりします。

B.2家族以上で伝道する。本当に福音を聴く準備のできた人を見つけるまでは、数家族あるいは数人、それも一度に2家族以上かふたり以上で働きかけることです。

C.目標とする日時を定める。少なくとも毎週1回はその家族と接する機会を持つようにし、各ステップを成就していく上で目標とする日時を具体的に決めます。適当と思われる日時を自分で決めて下さい。

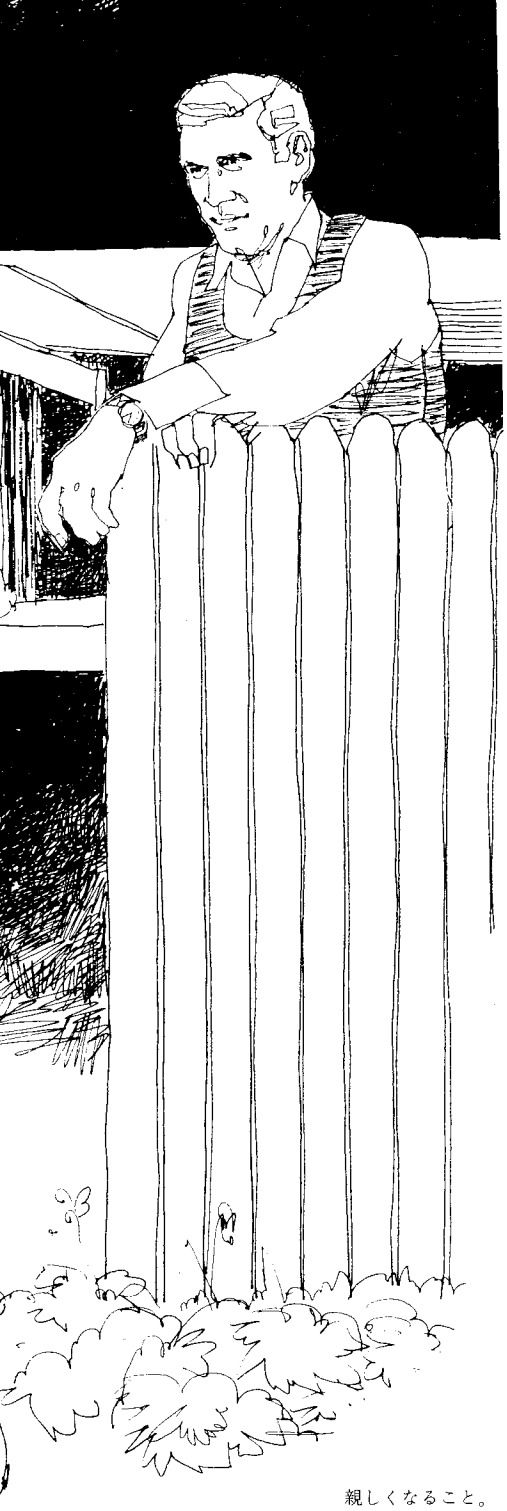
D.宣教師に紹介する。福音を聴く用意のできた人を見つけたときは、教える宣教師の割当てができるようホーム・ティーチャーに連絡します。以下のステップは便宜上いくつかの項目に分けてありますが、実際には省略する部分もあるでしょうし、無論このほかにも方法があるでしょう。

**概略：**

1.家族の選択。
2.親しくなること。
3.家族をあなたの家に招待する。
4.一緒に外出する。
5.自分が末日聖徒であることを知らせる。
6.教会関係の書物を贈る。
7.家庭の夕べに招待する。
8.初等協会、アロン神権や若い女性の活動、扶助協会に誘う。
9.教会の活動に誘う。
10.教会の集会に誘う。
11.証を述べる。
12.「黄金の質問」をする。
13.宣教師にあなたの家で求道者を教えてくれるよう要請する。

### ステップ1：祈りの気持をもって家族を選ぶ

A.次の質問を自分に問うてみて下さい。
——あなたは教会員でない人をだれか知っていますか；
教会について尋ねられたことはありませんか。
教会や教会員を尊敬している人はいませんか。
だれか近代の宗教に関心を示した人は



親しくなること。

いませんか。
この混乱した世の中での家族生活について関心を示した人はいませんか。青少年向けのプログラムを求めている家族はいませんか。
あなたが教会の標準を守っているということで、あなたに親しい人はいませんか。
系図に興味を抱いている人はいませんか。
最近家族に不幸があり、私たちが確信している救いの計画についての知識を喜んで受け入れられそうな人はいませんか。
結婚して日が浅く、私たちの教会で言う家族の絆についての教えを知る必要のある家族はいませんか。
子供の誕生で、家庭生活に指針を必要としている家族はありませんか。
だれかタバナクル聖歌隊のコーラスを聞いたことのある人はいませんか。親切で誠実な人はいませんか。
転居して来たばかりで近所の人と親しいつながりのない人はいませんか。
ソルトレークシティーを訪れたことのある人はいませんか。
世界博覧会でモルモンパビリオンに入ったことのある人はいませんか。

B.非教会員もあなたの友である。排他的であってはいけません。「あなたの隣り人を愛せよ」とは、すべての人を愛しなさいということです。

C.心から友人になりたいと思うこと。あなたは自分が選んだ家族や友との交わりを心から望まなければなりません。ただ単に教会の責任がもうひとつ増えたと考えるのでなく、真の友情を築くため心から主の助けを求める必要があります。

D.祈り。具体的に名前のあがった家族や人々についての導き、助言を求めて主に祈ります。

### ステップ2：親しくなること

A.各人の名前を覚えること。人の名前は正しく覚えます。これはその人の自尊心を高める上で大切なことです。

B.快活であること。笑顔を忘れずに！隣人が興味を持つような家庭にしましょう。

C.聞き上手であること。あなたの隣人は何を考えていますか。自分のことはさておき、隣人が関心を抱いていることについて話しかけなさい。

D.関心事について話し合う。例えば職業、家族ぐるみの活動、子供の関心事、余暇の過ごし方、個人の所有物（例：家、車、ペット、庭園、趣味等）について知ることです。家庭に入っている女性であれば、子供のこと、装飾、料理、裁縫、勉強、読書など家庭内での関心事について話し合うことができるでしょう。

E.各人のために何かをする。その人が引越しの最中であれば手伝いを申し出ます。また庭の手入れをしたり何か植えていたら、道具を貸してあげることができます。このようにして一緒に働く機会を作ると、その人のことがもっとよく理解できるでしょう。何か援助を必要としている御夫婦がいたら手伝ってあげて下さい。またしばらく顔を見ないようなときは、病気でないか、また何か困ったことがないかどうか確かめてみましょう。休暇で留守の間、家を見てくれる人を捜しているのかも知れません。そのときは喜んで見てあげるようにします。彼らの子供を連れてどこかに出かけたり、ピクニックに行ったりすることもできるでしょう。

F.祈り。どのようにして接していくか、またいかにして彼らを知ったらよいかについて具体的な助けを求め祈ること。

### ステップ3：家族をあなたの家に招待する

A.招待する理由を明らかにすること。あなたの家に招待するはっきりとした理由を持ち、それを相手に知らせることです。すでに「時々のおつき合い」を一層親しい間柄にしようという段階であれば、彼らがあなたの家を訪問したいと思うような、何か興味を引くもので価値あるものが必要になってきます。
幾つか例をあげると；
「8月の夏休みのとき、家族で旅行しましたでしょう。そのときの写真がきょうやっとでき上がって来たんですよ。お見せしたいと思っているんですが、今夜家にいらっしゃいません？」
「うちの家内、今夜のために何か特別料理を作っているみたいですよ。奥さんと一緒にいらっしゃって下さい。」
「私たちの新しい部屋がやっと完成したんです。是非見ていただきたいと思うわ。」
「週末に隣り同士でバーベキューパーティーを開くんですよ。土曜日の夕方

5時頃おいでになりませんか。」

B.書物を贈る。「聖徒の道」や教会のごく基本的な内容について記した書物は、好奇心をそそるかも知れません。しかし質問されない限り書物について説明する必要はありません。

C.祈り。あなたは友人に喜ばれる招待をしようとしています。それをどのようにするかについて特別に祈り求めること。

### ステップ4：一緒に外出する

A.家族が興味を抱いている事柄に焦点を合わせる。彼らがしたいと思っていることや彼らが興味を抱きそうなこと、特に彼らがまだ経験したことのないことを行なうようにします。これは教会活動でなければということはなく、友好を広め深める機会となればよいのです。

B.彼らに提案させる。彼らが行き先を決め、一緒に参りましょうという誘いがあったら、喜んで招待を受けます。その場合、もし場所や行事が適切でなければそのときは行けませんと断わり、代案を提案します。ここであなたの標準について説いてはなりません。招待したのは彼らなのですから。臨機応変に上手に行ないます。

C.祈り。どんな行事がよいか、またどのようにして誘ったらよいかについて祈り求めます。

### ステップ5：自分が末日聖徒であることを知らせる

A.教会の行事に触れる。近所の人から、「それは何ですか」と尋ねられたら、すぐ返答できなければなりません。会話に登場しそうな例を幾つかあげておきます。
「今夜はホーム・ティーチングに行くんです。」
「うちの娘の科学の先生と夫は同じ長老定員会のメンバーですって。」
「きょう北海道で伝道している甥から手紙が来ましてね。」
「このナプキン、この子がプライマリーで作ったんですよ。」
このような予備的な会話により、自分が末日聖徒であることを明らかにすることができます。そこがこのステップで目標とする所です。

B.興味を引く話をする。だれかあなたの先祖の中に教会で興味ある経験をし、それが原因であなたが教会に導かれたというような例があれば、それについて話すことができます。（下記参照）

C.内容の深い問題には触れないように。光栄の三段階に関する教え、あるいは示現についての話などのような福音の奥義に関することや個人的に得た非常に霊的な経験は、初期の段階にあるこの時点では話し合わない方がよいのです。福音は簡潔です。混乱させるような方法はどらないこと。

D.祈り。いつ、どこで、どのようにしてこのステップを踏んだらよいのか導きを求めなさい。

### ステップ6：教会に関する書物を贈る

A.教会のパンフレットを渡すことを考える。彼らが教会に関心を示したときは教会を紹介するパンフレット、例えば「ジョセフ・スミスの証」、「どの教会が正しいか」、「世界の教会」などをあげてもよいでしょう。

B.「知恵の言葉」のパンフレットをあげる。友人がタバコやアルコールをやめたいということを口にしたり、その習慣を守っているあなたの標準に興味を示したら、「知恵の言葉」のような関係のあるパンフレットをあげるとよいでしょう。

C.選択は思慮分別を用いて。書物やパンフレットをあげる場合は、あなたが読んだものの中でその家族にとって一番助けとなると思われるものをあげることです。写真や絵の入った書物の方が初めての人にとってはわかりやすいでしょう。

D.祈り。どのような書物をプレゼントし、どのようにして読むことに興味を起こさせたらよいかを決定するため、主に助けを求めます。

### ステップ7：家庭の夕べに招待する

A.堅固な家庭の様子を紹介する。証の次に訴えかけるものは堅く結ばれた家族関係です。ほとんどの人が家庭内での問題の解決に役立つものを必要としているからです。教会の方法を紹介してあげましょう。（教会で教えられていることだとは言わずに進めること。）例えば父親はいかに家庭を管理するか、家族の一人一人がどんなに大切か、また家族の一致によってどんなに家庭内が和やかになり愛と理解が生まれるか、などについて示してあげるのです。

B.よく計画したプログラムのもとに家庭の夕べを準備する。月曜日以外の夕べに友好を深めるための家庭の夕べを開く計画を立てます。月曜日の夜はあなた自身の家族のためにあけておかねばなりません。あなたの家族一人一人がよく参加できるような計画を立て、招待した家族も当惑しない程度においてできるだけプログラムに参加できるようにします。

C.思いやりある態度で臨むこと。もし幼児が一緒の場合は、そのことを踏まえてプログラムを計画し、時間を調整します。

D.家族について話してもらう。家族の計画や今までの経験、生活などについて話してもらいます。

E.教会に関する質問は避ける。通常、教会に関する質問は非教会員にとってふさわしいものではありません。その代り、招待した家族あるいは若人に必要で価値のある、健全で基本的な原則をレッスンしたり話し合ったりするとよいでしょう。

F.覚えの書を紹介する。あなたの子供の覚えの書を開き、それについて話し合うことができます。これは大概、招待した家族の興味を引き、あなたの家族の経歴や関心事に心を奪われてしまうでしょう。

G.祈り。どのようにして招待すればよいか、またどのようにすれば家庭の夕べを活気あるものにできるか、霊感と助けを求めて祈ります。

### ステップ8：初等協会、アロン神権と若い女性の活動、セミナリー、インスティチュート、扶助協会に誘う

A.教会全体のプログラムを考慮する。教会には親が子を教育し、家族の絆を強めることのできる完全なプログラムがあります。これを非教会員の家族に役立てて下さい。

扶助協会は女性のためにあり、中でも教養、ホームメーキング、社会のクラスが良いと思います。しかし彼らが扶助協会において話し合われる原則をまだ理解していなければ、霊的生活には誘わないよう気をつけて下さい。それぞれの姉妹はできるだけ多く友人を扶助協会に連れて来るようにすべきです。

アロン神権と若い女性やメルケゼデク神権ＭＩＡは、12歳以上の全独身者のために設けられています。これらの集会ではスカウティング、ダンス、ドラマ、スピーチ、青少年男女のための完全な奉仕プログラムが組まれています。子供がＭＩＡに出席していれば、友だちを集会に誘って来るように言ってみましょう。

高校生、大学生の年代に相当する人々のためにはセミナリーとインスティチュートがあり、福音を教えるすぐれた場となっています。非教会員の友人をこれらの特別プログラムに誘ってみるよう、子供に勧めてみましょう。

初等協会は３歳から12歳までの子供たちのためにあります。子供たちはここでイエス御自身のことについて、またイエスの愛について学ぶと同時に訓練を受け、躾られます。子供たちに友だちを初等協会に誘うように言って下さい。

B.祈り。非教会員の家族が教会の補助組織に関心を持つようにするにはどうすればよいか、また彼らが教会に集う道を主が開いて下さるよう祈ります。

### ステップ９：教会の活動に誘う

A.彼らの関心事について考慮する。ドラマ、音楽、スポーツなどの活動は特に親しみやすい教会行事と言えます。このような活動に行ってみる気持があるかどうか家族に尋ねてごらんなさい。

B.扶助協会の活動や特別なホームメーキングの集会に誘う。これらの活動は新しい友人を得たり、新たな関心を見出すものです。

C.ファイアサイドを開く。ファイアサイドは友人を招待する非常に良い機会ですが、事前に、福音の奥義に触れるような話合いや「福音についての討論」が行なわれないことを確かめておくべきです。前もって調整できるだけの時間を与えるならば、ファイアサイド委員会が喜んで非教会員の招待者に最適な集会を企画してくれるでしょう。

D.祈り。どのような行事が友人に強い印象を与え、霊感をもたらすかを知るため導きを求めること。

### ステップ10：教会の集会に誘う

A.よく考えて招く集会を選ぶ。集会は教会についての話合いを含んだ霊的なものであるべきです。日曜学校、聖餐会、バプテスマ会、神権者管理の集会がよいでしょう。非教会員をどのように集会に誘うかは、次の例を参考にして下さい。

1.「あなたはもう末日聖徒をよく御存知ですし、教会の書物もたくさん読んでいらっしゃいます。それで教会の定例集会に是非御一緒したいと思いますが、御家族お揃いでお出かけになりませんか。」
2.「私たちの教会で大切なことは主から啓示と戒めを受けていることです。そのひとつに聖餐会に出席することがありますけど、どのようなものか出席して御覧になりませんか。」

B.何を期待されているかを彼らに気づかせる。「私たちの聖餐式を御覧になって珍しさをお感じになると思いますが、きっと心に安らぎを覚えられると思います。」「今度、『モルモンとは』（オープンハウス）というすばらしいプログラムがあるのですよ。スライドや映画、その他いろいろな手段を用いて教会の全プログラムを紹介するのです。」（オープンハウスは、教会員が伝道する際一番助けになる方法です。）

C.祈り。接触するたびに前もって祈りを捧げること。

### ステップ11：証を述べる

A.最後に証を述べる。あなたはこれまで自分の証を述べるために努力を重ねてきました。恐れることはありません。証を述べるのはむずかしいことではないのです。ここに至るまでには、彼らはあなた方の気持を是非とも聴きたいと思うようになるでしょう。勇気を持って下さい。

次に幾つか例をあげておきます。

1.「私たちは今まで福音についていろいろ話し合ってきましたけれど、私が福音をどのように感じているのかお話したことはありませんでしたね。あなたにもお知りになっていただきたいと思いますが……」
2.「祈ることはすばらしいことです。主は確かに祈りに答えて下さいます。真理を知りたくて勉強し、祈ったときに、私の祈りは答えられたのです……。」
3.「高田君、僕たちは親友同士だ。それで君に私の一番大切にしているものを分けてあげたいのだが。」

B.あくまでも簡潔に。証は簡潔に述べることです。非常に霊的な経験や啓示には触れないように。そういった経験はあなただけのものにしておきましょう。そうしないと福音を学び始めたばかりの感じやすい心をいたずらにかき乱すだけです。

C.祈り。この時期に何よりも大切なのは祈りです。主のみたまがあなたと共にあって、彼らの心を動かせるよう主の助けを求めなさい。

家族をあなたの家に招待する。

### ステップ12：「黄金の質問」をする

A.決まった質問というのは別にありません。そこであなたの家族の準備に応じた質問を選ばなければなりません。

簡単な例をあげると;

1.「もし主がこの地上にもう一度主の真の教会を回復されたということがおわかりになれば、そのことを勉強してみたいと思われますか。」

2.「救い主がこの地上におられた間に唯一の教会をお建てになったのであれば、なぜ今日このようにたくさんの異なった教会があると思いますか。主の教会は昔も今も同じであるとは思われませんか。またなぜ私たちがこの教会を主の教会だと信じているのか、お聞きになりたいと思いませんか。」

3.「今日、この地上に生ける予言者がいるとおわかりになれば、彼が真の予言者かどうか確かめてみたいと思われますか。

4.「あなたはこれまで、私たちの教会でなぜモルモン経を使っているのかと不思議に思ったことはありませんか。」

B.彼らが関心を抱いているものを活用する。教会に関することで彼らの関心を呼ぶ系図、青少年プログラム、福祉計画などを取り上げます。そしてその後、教会のその他のことについてもっと知りたいかどうか尋ねます。

C.もう一度機会を待つこと。もし彼らが今、教会について勉強したくないようであればそのまま交際を続け、少しでも関心が残っていれば次の教える機会を待ちます。

D.祈り。あなたの家族を励まして、もっと勉強したいと思うようにさせるにはどうすればよいかについて答えを捜し求めること。

### 最後のステップ：宣教師にあなたの家で彼らを教えてくれるよう要請する

A.彼らの要請に応える。彼らがもっと詳しく知りたいと言ったら、次のように言います。「――日に家に教会の若者に来てもらいますから、そのとき教会についてお話合いなさってはいかがですか。」

B.選択は彼らに任せる。「水曜日と金曜日のどちらが御都合がよろしいですか。」

C.落ち着いた気持にさせ、力づけてあげなさい。幸い、彼らはあなたの家庭に親しみ、あなたの家に行けば霊的な雰囲気を得られることを知っています。と言うことは、あなた自身で環境や活動を管理できるということです。そうすれば、彼らは勉強している間一層あなたの心遣いに感謝することでしょう。

D.ホーム・ティーチャーに報告する。ホーム・ティーチャーに紹介することは非常に大切です。そうすれば彼らは宣教師を調整してくれます。

E.祈り。あなたの家庭がみたまに満たされ、彼らが心を動かすような雰囲気をかもし出せるよう祈り求めなさい。

### なぜ伝道するのか

この神権時代に主が伝道に関して与えられた戒めは非常にはっきりしている。1832年来、証を持つ教会員はすべて「その隣人を警むる責任あり」（教義と聖約88：81）と言われてきた。

その時以来、教会の大管長は一貫して伝道の業を推進してきた。1912年、大管長会はステーキ部および伝道部の伝道活動をいかに相互調整するかについて勧告を出している。それは時宜に応じて改訂されてきたが原則に変わりはない。

1.伝道の業を推進する責任は全教会員に課せられる。

2.ステーキ部およびフルタイム宣教師としてその任に召された者は、教会員が自らの伝道という責任を果たせるよう援助しなければならない。

3.教会の全組織およびプログラムは、福音を広めるためその持てる力を最大限活用すべきである。

4.ホーム・ティーチングは、教会員が宣教師および教会組織を活用することができるよう、その仲立ちとなるものである。

5.今や伝道はワード部伝道リーダーを中心としたワード部／支部中心の活動であり、ワード部神権役員会およびワード部評議会を通じて相互調整される。

ここで大切なのは、これらの指針が伝道の業を推進させる上で役立っているということである。なぜなら、私たちが福音に対する証を述べなければならない理由のひとつとして、私たちの証の後に主御自身の証が来るからである。

「汝らの証詞の後より地震の証詞来る……また雷の声、電の声、暴風雨の声……。」（教義と聖約88：89，90）

現在、約1万8千人のフルタイム宣教師と数万にのぼるステーキ部宣教師が、この証を述べるため並々ならぬ努力を重ねているが、彼らは教会員一人一人の援助を必要としている。

この伝道の業を援助するという責任に加えて、私たち自身の永遠の喜び、光栄、昇栄は私たちが人々の生活に何をもたらしたかによって決められるということを考えてみようではないか。神は御自分がいかに人の価値を重んじておられるかを気づかせて下さっている。（教義と聖約18：10－16参照）そこで主は私たちに、唯一人の人たりとも救わば大いなる喜びを得ん、と約束された。中には伝道することを重荷だと見る人もいるが、反面この「責任」は人に永遠の喜びをもたらすのである。

予言者ジョセフ・スミスは言っている。「もしあなたが人を高めるならば、その業そのものがあなたを高めるであろう。この方法以外に人が正しく永久に自らを高める道はないからである。」(Documentary History of the Church「教会歴史記録」第5巻P. 385)

確かに、もし私たちが福音を分ち合うならば、私たちには喜びと一層の進歩がもたらされるであろう。私たちには生きとし生けるすべての人に、またこの先この地上に生まれ来る人に福音を分つ責任がある。この見地に立ってそのことを考えていただきたい。

「私たちは前世における大会議のとき全能者とある協定を結んだ。主は自ら作成せる計画を提案され、私たちはそれを受け入れた。その計画は全人類のためのものであり、それゆえ私たちは……その時その場において単に自分たち自身のためばかりでなく、全人類の救い手となることに同意したのである。私たちは……主と共に主の業を推進する者となった。救いを与えることは主が自ら課せられた義務であり、この大いなる業は栄光あるものである。同様に、それは人の自ら課せる義務であり業であり、また喜びであり悲しみであり、究極において人に大いなる栄光をもたらすものなのである。」(「シオン山の救い手」P. 16)

# 殉教を証する少年

ゴールデン・R・ブキャナン

まだ8歳か9歳の頃でしたが、私は祖父が声を震わせながら話してくれたことを今でも覚えています。

アーチおじいさんは母の揺り椅子にもたれて、昼食を待っていました。すると不意に私を呼び寄せてひざの上に乗せ、こう言いました。「ゴールデン、私はもう年じゃ。あまり長くない。お前にぜひとも話しておきたいことがある。予言者が殺されたとき、私はノーブーにいたということを孫たちにまたその孫たちにも知ってもらいたいと思ってな。」

年老いた祖父は体を震わせながら、びっくりするほど強く私を抱きしめました。私はそのとき初めて、深い怒りに満ちた祖父の心を知ったように思いました。老いの目は激しい怒りに燃え、やさしい口ごもりがちな声は、氷のように冷たく張りつめた声になりました。

「私は、愛する予言者に手をくだしたやつらが憎くてしようがなかった。」

ため息をつくと、祖父の老いた体は心もち和らぎました。

「私は、カーセージから予言者たちの亡きがらが帰ってきたとき、ちょうどその場にいたのだよ。血まみれの死体も見たし、予言者たちの奥さんや近所の人たちの嘆き苦しむ声も聞いた。また泣きじゃくる彼らの子供たちを見て、慰めようと努めた。

私は、予言者の子供たちとは知り合いで、よく行き来しては遊んでいたものだった。それが今、子供たちは私と同様、父を失ってしまったのじゃ。彼らの父親は凶弾に倒れて殉教し、私の父は迫害や憎悪、追い立てにあって命を落とした。しかし、父とてまぎれもなく真理の殉教者だったのじゃ。

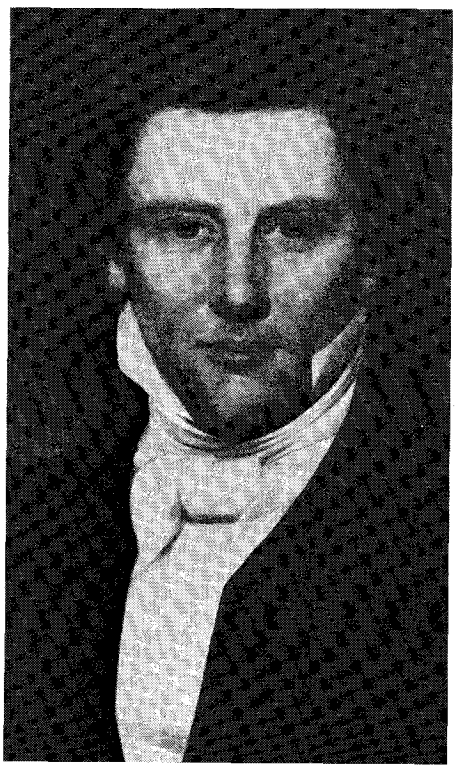
私は、皆が暴徒の目をくらますために砂袋を埋めて墓に見せかけ、別の秘密の場所に亡きがらを葬るのもこの目で見たのじゃ。」

祖父は一休みして、力を取り戻すと、また話し出しました。「ゴールデン、よく聞いておくれ。それというのも、お前にぜひ知っておいてほしいから話すのじゃ。予言者の体がカーセージの牢獄の窓から落ちると、暴徒たちは予言者をなぶり物にしようとして、どっと駆け寄った。だが、神様がこの暴力をそのままにしておかれるはずはなかった。予言者と悪者の間に稲光が走って、暴徒たちは予言者に手を触れることもできなかったのだ。ゴールデンや、このこと、そう、暴徒たちが予言者に手をかけることができなかったということをしっかり覚えておくのだよ。悪い人はこれまでも追っかけてきたし、今も追っている。裁きの日まで跡を追ってくるだろう。だが、予言者に手をかけることはできんのじゃ。」

話し続けて疲れてきたのか、祖父の声はだんだん小さくなりました。そして、「私もその日に居合せたいものだ」と言うと、うとうとし始めました。そして顔に次第に赤味がさしてきました。私は祖父が目を開けたとき、そこにこれまで一度も目にしたことのない、明るく輝く目を見ました。祖父は長い腕をまわして私を抱きしめると、今度はしっかりとした声で、こう言いつけました。

「坊や、おじいさんの方を見てよくお聞き。おじいさんはその場にいて、その様子を見ていた、そして予言者を愛していたとな。

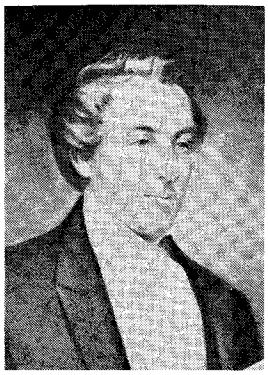
ジョセフ・スミスは神の予言者だった。神様はジョセフを通して、ご自分の教会を回復なさったのだ。教会は決して滅ぼされることはないし、この地上から取り去られることもない。なあ、坊や、私が話したことを忘れないでおくんだよ。おじいさんはそのとき14歳だった。そして、その場にいたのだとな。」



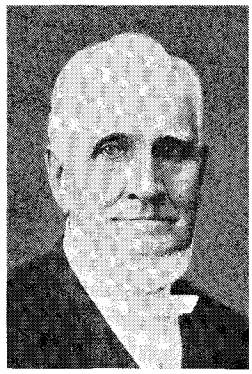
若者ゴールデン・R・ブキャナン兄弟の祖父は名前をアーチボルド・ブキャナン（1830－1915）と言い、彼の一家は1835年イリノイ州リマで教会に加入。彼は1852年ユタに行き、エルク・マウンテン・インディアン伝道部での伝道を終える。その後、多年にわたってユテ・インデイアンへの通訳者としてブリガム・ヤングに仕える。ブキャナン兄弟は、第1セビヤーステーキ部の高等評議員であった。

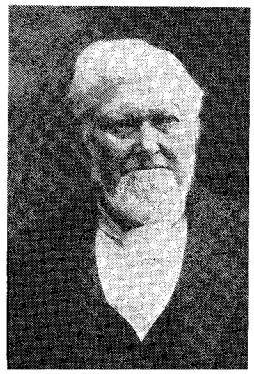
ゴールデン・ブキャナン兄弟は、ソルトレーク神殿で結び固めの儀式の補佐をしている。ソルトレーク・ビッグコットンウッドステーキ部ビッグコットンウッド第12ワード部に属している。

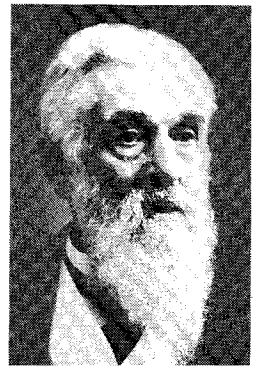
# 予言者と伝道

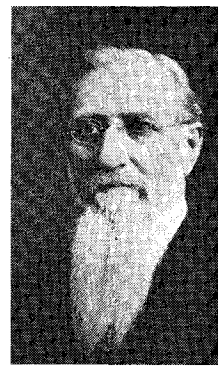

ジョセフ・スミス

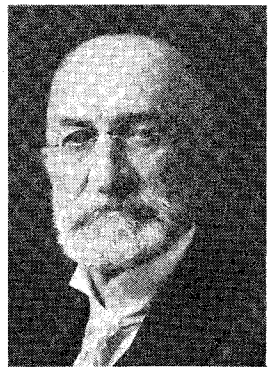
ブリガム・ヤング


ジョン・テイラー

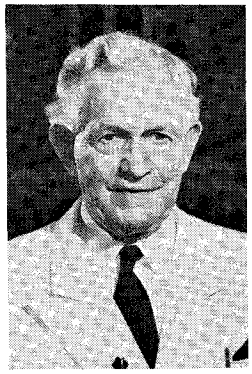

ウイルフォード・ウッドラフ


ロレンゾ・スノー


ジョセス・F・スミス


ヒーバー・J・グラント

ジョージ・アルバート・スミス


デビッド・O・マッケイ

ジョセフ・フィールディング・スミス

ハロルド・B・リー

スペンサー・W・キンボール

御父と御子が少年予言者に現われたときから現在まで、この教会は伝道の教会であった。地上のどの組織も、全人類にイエス・キリストの福音を伝える責任を持ってはいない。予言者ジョセフは、「万事を言い尽くした後、最も重要な責任とは福音を説くことである」と言明した。（Teachings of the Prophet Joseph Smith 「予言者ジョセフ・スミスの教え」P.113）

歴代の大管長は皆、伝道に熱心であった。次に掲げる話は、教会の大管長となった人がいかにして宣教師と出合い、改宗に導かれたか、あるいは予言者たちがどのような伝道経験をしたかの紹介である。

## ジョセフ・スミス

ジョセフ・スミスは、この神権時代に教会の管理者として全時間を伝道活動のために捧げた唯一の予言者である。教会が回復された初期、まだ幼ない教会がめざましい発展を始めた頃、ジョセフはさまざまな折りをとらえて伝道の使命を果たした。

教会歴史部記録保管庫の秘蔵物のひとつに、すり切れた皮の日記帳がある。そこには14ページにわたって、第一副管長のシドニー・リグドンと西ニューヨーク出身の改宗者フリーマン・ニッカーソンを伴ないカナダに向かった、1833年後半のジョセフ・スミスの伝道旅行の記載がある。ジョセフはほぼ毎日日記をつけ、彼自身の筆によるものと口述を書き取らせたものとが半々である。日記には伝道の成功が詳細にわたって記録されていると同時に、自分の仕事は真実であるという確信や希望や苦労、さらに愛する人たちへの気づかい、落胆や成功、主への深い信頼が記されている。

10月5日、3人はニッカーソン兄弟が用意した荷馬車で、東部へ向けカートランドを出立した。6日後、ジョセフは「気分は快適だ。主が共におられる。だが家族のことが非常に気がかりだ」と書いている。（日記〔英文〕P.7）その晩、彼は啓示（教義と聖約 100）を受けた。その中で、主はジョセフとシドニーに両方の家族は元気で主のみ手の内にあると言い、行く先の伝道地では多くの人が彼らの証を待っていると告げられた。「……汝の旅をつづけて心を悦ばすべし」というのが、彼らの受けた指示であった。

3人はカナダに向かう途中も多くの機会をとらえて民衆に福音を説いた。がっかりすることはときたまあっても、彼らの説教はだいたい皆成功を収めた。ジョセフはこう記している。「主はある聖徒たちにすばらしいやり方でみたまを与えられた。それをアブラハムの神に感謝している。主は家族を祝福し、守って下さる。」

10月27日は改宗活動の圧巻とも言うべきすばらしい安息日であった。ジョセフとシドニーはまず「マウント・プリザントの大会衆に説いたが」、ジョセフの言葉によれば、「その後私は12人にバプテスマを施した。」ニッカーソン兄弟の息子、モージスとエレイザーもその中にいた。ジョセフはさらに記している。「その外の人も深い印象を受けてまた集会を開いてほしいと望んだので、翌日にその約束をした。28日、月曜日――夜私たちはパンを裂き、もうふたりにバプテスマを施した後、手を按いて確認の聖霊の賜を授けた。ある者たちにみたまの偉力が発揮され、他の者には平安が与えられた。神がこの地にみ業を進められ、あらゆる人が神を知らんことを。アーメン。」（日記〔英文〕P.16）

「29日、火曜日――午前10時に説教をした後ふたりにバプテスマを授け、水辺で確認をした。昨晩はE・F・ニッカーソンを長老に聖任したが、姉妹たちのひとりが異言の賜を受け、聖徒たちはそれをことのほか喜んだ。神が御子のため、彼らの間に賜を増し加えられんことを。」（日記〔英文〕P.17）

伝道の使命を達成した彼らは、すぐにカートランドに向かった。1カ月留守にしたためカートランドでの仕事が彼らを待っていたからである。彼らは秋の日をまる5日かかってカートランドに到着した。ジョセフは伝道日記に最後の記録を残している。「家族は主の約束通り、皆元気でいた。その祝福を、主の聖なるみ名に感謝するアーメン。」

---

※ジョセフ・スミス　Diary　「日記」
1832－1834年P.5－18（自筆）、ユタ州ソルトレークシティー　LDS教会記録保管庫ジョセフ・スミスコレクション。カナダ伝道に関して同じ記述が後にジョセフ・スミス　History of the church　「教会歴史」第1巻P. 416－23に記録されている。この記事に関しては、おおむね「教会歴史」に準じた。

## ブリガム・ヤング

ブリガム・ヤングは、福音を聞いた1830年から1837年まで、福音のために、広い地域をほとんど徒歩で旅してまわった。

1839年9月にブリガム・ヤングとヒーバー・C・キンボールはモントローズを発ち、英国伝道に向かった。オハイオ州カートランドに着いたとき、キンボール長老はこう記録している。

「ブリガム兄弟は1ヨークシャーシリング（12.5セントにあたる）を持っており、今までの出費をざっとみてみると、プリザント・ガーデンで旅行経費の全額が13ドル50セントだったというのに87ドル以上も使っていたことがわかった。400マイル余り駅馬車に乗って、1マイルにつき8セントから10セントを払い、日に3度食事をしてその費用が1回に50セントで、宿にも50セントを払った勘定だ。ブリガム兄弟は私が内緒で財布を持っていて、ときどき自分のトランクや服にお金をはさんでくれるのだろうと思っていたのだが、そうではない。お金は天使がトランクに入れて下さったに違いない。私たちにいるものを知った天使が、日ごとの必要を恵まれたのだ。（レオン・R・ハートショーン　Classic Stories from the Lives of Our Prophets 「歴代予言者物語」〔英文〕P.47）

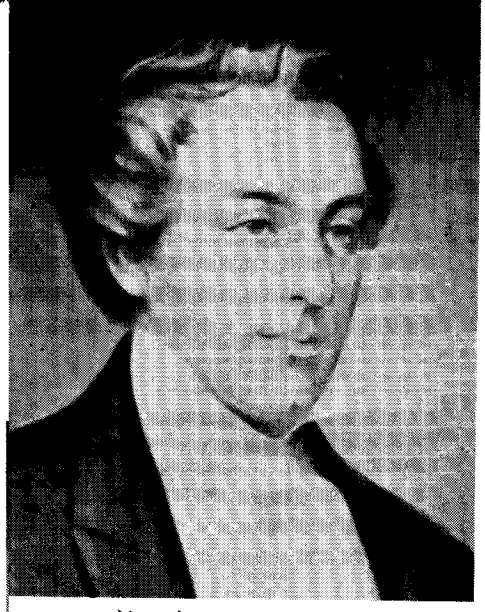
## ジョン・テイラー

第3代大管長ジョン・テイラーは、大いなる信仰と確信の持ち主であった。あるとき、ウイルフォード・ウッドラフと合流して英国伝道に行く予定でニューヨークへ向かったが、プラット長老の家に着いたときにはたった1セントしか手元に残っておらず、英国への船賃はまだ未払いだった。ところが、テイラー長老はお金は足りていますかと聞かれて、たっぷりありますと返事したのである。

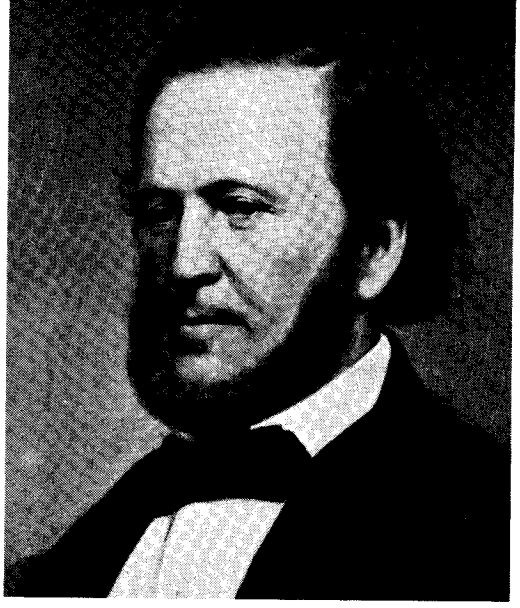
それを聞いたプラット長老はテイラー長老のところへ来て、自分の書物の出版を幾らか援助していただけないかと尋ねた。プラット長老がテイラー長老の「たっぷりある」と言う言葉の意味がわかったのはそのときだった。

テイラー長老は言った。「衣服は足りています。あなたのおかげでたらふく飲み食いし、立派な宿も借りました。それだけあって、1ペニーが残っているし、1文の借りもないし、たっぷりじゃありませんか。」

伝道に出発する段になって、テイラー長老は長老たちからのお金を受けとらず、自分の代わりにプラット長老にあ



ジョセフ・スミス



ブリガム・ヤング

ジョン・テイラー

げて下さいと言い、ウッドラフ長老に向かって言った。「あなたの船に私の分の席を取って下さい。費用は払いますから。」みたまがその都合はつくと語っていたのである。彼はみたまが自分を決して裏切らないことを知っていた。

テイラー長老はだれにもお金を乞いはしなかったがさまざまな人から充分な寄付を受け、自分の旅費ばかりか、同行を願い出たセオドア・ターリー兄弟の費用まで負担できたのである（ハートショーンP.77－79）

## ウイルフォード・ウッドラフ

ウイルフォード・ウッドラフの改宗談は少年のときに始まる。彼は、キリストの本当の教会はまだ地上になく、やがて昔通りの賜と力を持って再び地上に回復されるだろうと信じて、青年時代はどの教会にも入らないでいた。「永遠の福音の原則を初めて聞いたとき、私は心底それを信じて、最初の説教を聞いたあと、バプテスマを受けた。神のみたまが力強く、これは真実だと証したからだ。」

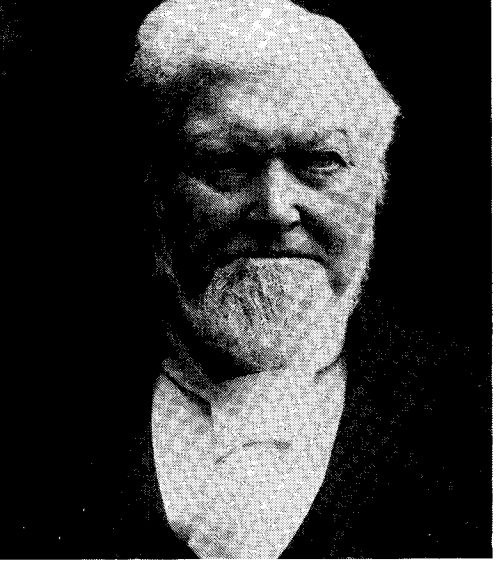
1833年の冬、ゼラ・パルシファー長老とエライジャ・チニー長老がウッドラフ家を訪れた。ウイルフォードと兄のアズモンは不在だったが、アズモンの妻は夫や義弟ウイルフォードの気持をよく察していた。ふたりはその希望と期待について、家庭の中でよく語り合っていたのである。そのため彼女は長老たちをねんごろに迎え、夫と弟は説教を聞きたがるでしょうと話した。

当時のモルモンの宣教師の慣例に従って、小学校の校舎を会場に集会が予定され、村中に通知がまわった。その目新しい経験を、ウイルフォード・ウッドラフが簡潔見事に語っている。「家に帰ると義姉が集会のことを教えてくれた。私はすぐに馬を牧場に放して、（草を食わせるため）、夕食も待たずに学校へ出かけた。行く道すがら、主のみたまをたもうように、その男たちが神のしもべであるならそのことがわかるように、私の心に彼らが話す神聖な教えを受け入れる用意ができるようにと、すこぶる真剣に祈った。

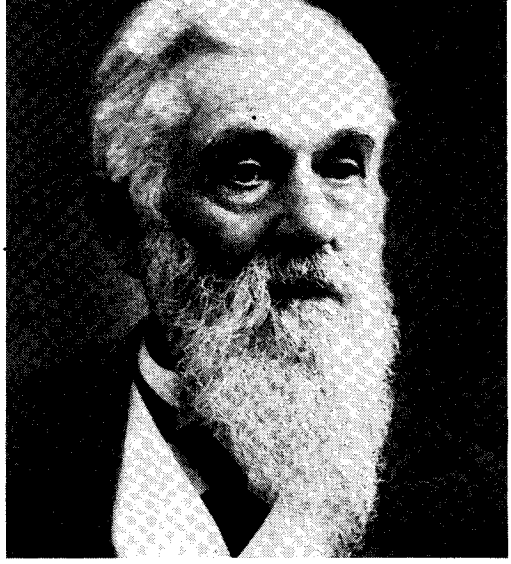
集会場所に着くと、会場はすでにいっぱいだった。兄のアズモンは先に来ていた。彼も、男たちの言うことを聞きたがっていたのだ。私は満員の人込みをかきわけて、一部始終が見聞きできる書き物机の上に腰かけた。

パルシファー長老の祈りで会が始まった。彼はひざまずき、イエス・キリストのみ名によって主に心の願いを祈った。その祈り方と祈りそのものは、私の心に非常な感動を与えた。主のみたまが私に下って、彼は神のしもべだと証した。歌のあと、彼は1時間半にわたって会衆に説教したが、神のみたまが豊かに注がれて、モルモン経と予言者ジョセフ・スミスの使命は神より来た正しいものであると、力強く証した。私は彼の言うことをすべて信じた。みたまはそれが真実だと証をした。それからチニー長老が立って、パルシファー長老の言葉は確かだと彼の証をつけ加えた。

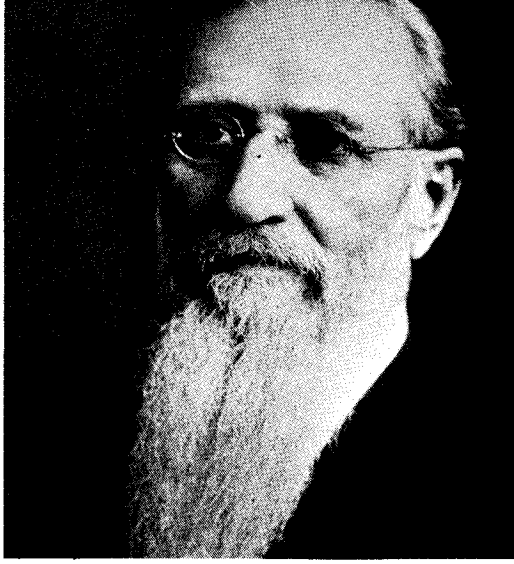
そのあと長老たちは、賛非両論どちらでも、聴衆が説教について意見を述べる時間を取った。と、すかさず私は立ち上がっていた。主のみたまが、長老たちの述べた教えが確かなことを証せよとせきたてたのだ。私は彼らに反対しないようにと、隣人や友人を説得した。彼らは神のまことのしもべだからだ。彼らはその晩、イエス・キリストの純粋な福音を私たちに説いてくれたのだ。私が腰をおろすと、兄のアズモンが立って同じような証をした。続いて何人も証をした。」（ハートショーンP.106－108）



ウイルフォード・ウッドラフ



ロレンゾ・スノー



ジョセフ・F・スミス

## ロレンゾ・スノー

ロレンゾ・スノーは回復された教会の話を初めて聞いた当時、職業軍人に心をひかれる非常に有能な大学生であった。姉のエライザ・R・スノーが教会に改宗して、弟も改宗させようと努めていたが、スノー大管長はジョセフ・スミスの父親に強い印象を受けて、その感化を自らこのように記している。

「彼の言葉には驚いた。『大丈夫です。心配いりません。主はこの偉大な末日の業が真実であることをあなたに示され、あなたはバプテスマを受けたいと思うでしょう』というのだ。……私は原則を研究した。……予言者が重大な事柄について話すのを聞いた。彼はしばしば聖霊に満たされ、天使長のような声で神の力に満ちて語った。体中が輝き、顔は光って、積もった雪のようにまっしろに見えるくらいだった。……ついに私の祈りは答えられ、真実なことを充分に確信して、ジョセフ・スミスが神を見たという証を自分で知ろうと、バプテスマを受けたいと思うようになった。……

当時私は世俗的野心満々の青年で、進んだ大学教育を受け、大望を果たす見込みも手段も目に見えていた。そのうえ金持ちで誇り高い……友人や親戚が大勢、私が数々の名誉を我がものとするのを期待しながら見守っていた。そんなことから、私が洋々たる前途を捨て、彼らをがっかりさせて、初期のその頃は貧しく無知だと思われ、軽蔑されていた『モルモン』に加わる決心をするには、並々ならぬ努力が要ることが容易に察せられた。……

しかし、主の助けによって（主が助けて下さったのだと確信しているのだが）、私はプライドや世俗的野心や志を犠牲にし、子供のように謙遜になってバプテスマの水の中に入り、福音の儀式を使徒と称される方から受けることができたのだ。」

スノー長老は教会の研究を続け、1836年6月オハイオ州カートランドでバプテスマを受けた。（ハートショーンP.130）

## ジョセフ・F・スミス

ジョセフ・F・スミスはわずか15歳のときにハワイ伝道に召された。その2年後、倉庫と集会所が、チャールズ・クレメント・ハースト青年（ハワイに赴任したばかりの新任宣教師）の起こした事故で丸焼けになり、そこにトランクや持ち物を置いていた長老たちは服や日記も含めて全財産をなくしてしまった。他の長老と同様、ジョセフ・F・スミス長老も持ち物の大半を集会所にしまっておいたので、火事のため身ぐるみほとんど失ったわけである。なくした物の中には、衣服や、祝福師ハイラム・スミスに贈呈されたモルモン経と教義と聖約が入っていた。その1冊には長老の証明書もはさんであった。家が全焼したとき、スミス長老のトランクは中身ともども灰になったが、宣教師の証明書だけが焼けずに残っていた。何か驚くべき方法によって、まわりが焦げただけでそっくりそのまま残されたのである。証明書がはさんであった本はすっかり焼けたというのに、証明書はひと文字すら消えていなかった。（ハートショーンP.175）

## ヒーバー・J・グラント

ヒーバー・J・グラントの最も大きな伝道経験は、彼自身の身内の中で起きた。

「私は肉体を受けたこの世での一番感銘深い出来事を忘れはしない。無頓着で無関心で気ままな、イエス・キリストの福音に何の興味も持たなかった異母兄弟の姿を、聴衆の中に見つけたのだ。

彼の姿をこの建物の中で初めて見、この業が神よりのものかどうか、彼が知恵と知識を神に求めていることを知って、私は頭を垂れ、もし私に説教が求められているならば、主のみたまの啓示により、まことの末日聖徒が信じる聖霊によって、主が私に霊感をたもうよう、そして私が自分の能力以上のことを主から霊感を受けて語ったと、彼にわかるようにと祈った。

もし彼がそのことを悟ったならば、神がこの業は神のものだという証を彼に与えられたのである。私はそのように彼に指摘できると感じた。

私はポケットから常々携帯している『聖句の手引き』という本を取り出して、話をしようと席を立ち、目の前の説教壇の上にその本を置いた。……私は主の霊感と末日聖徒の信仰を祈った。そしてその瞬間から30分の説教が終わって席に帰るまで、あの本のことはまるきり頭にのぼらなかった。……

私は30分の説教をもっぱら、神の実在とイエスがキリストであるという証と予言者ジョセフ・スミスの驚嘆すべきすばらしい働きの証に費やし、ジョセフが実際に真実の生ける神の予言者だという神から与えられた知識について証を述べた。

翌朝、あの兄弟が私の事務所へやってきて、『ヒーバー、ぼくはきのうの集会に出て君の説教を聞いたよ』と言った。

私は、『自分の兄弟の説教を聞くなんて初めてなんでしょう？』と言った。

すると彼は、『いや、いや。何度も聞いてるよ』と答えた。

『たいてい遅れるんでギャラリーにいるんだよ。よく会が終わる前に失礼するんだが、しかしきのうの話は最高だったね。君の力以上の話だったよ。主から霊感を受けたんだな。』それは前日私が主に祈ったのとそっくり同じ言葉だった！

私は彼に言った。『今も福音の証が得られるように祈っているんですか。』

『うん、夢中になるくらいにね』という返事だった。

私は、『きのうは、ぼくどんなことを話しましたか？』と尋ねた。

『予言者ジョセフ・スミスの神聖な使命についてだよ。』

そこで私は言った。『ぼくは自分の力以上の霊感を受けたんです。これまであなたが聞いた話のどれだって、きのうの話みたいじゃなかった。でもあなたの方で何の反応もないと、主はあなたの注意をひくためにこん棒であなたのことをなぐりつけるかもしれませんよ。イエス・キリストの福音について、人が神の霊感を受けて能力以上の話をし、予言者ジョセフ・スミスの神聖な使命を証することのほかに、またどんな証が欲しいというのですか？』

彼はその次の安息日に、私にバプテスマを願い出た。」（ハートショーンP. 216, 17）

---

B・F・グラントはヒーバー・J・グラントの異母兄弟で、40歳の年にバプテスマを受けた。

## ジョージ・アルバート・スミス

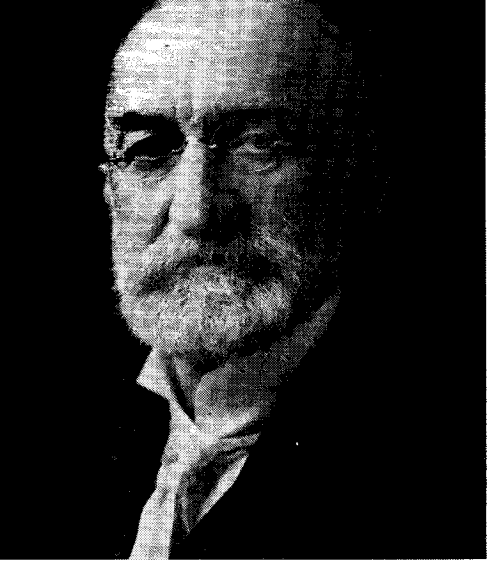
ジョージ・アルバート・スミス大管長は南部諸州で伝道中に、次のような経験をした。

「私たちは木の生い茂った農村地帯に入った。その日は近隣の非常に人なつこく、話をよく受け入れてくれる人たちと、何回も集会を持った。ある末日聖徒が、親切なことにその日の宿をと私たちを招いてくれていた。その家は2部屋と小さな差掛け小屋がついた丸木作りの簡素な家だった。総勢6人の宣教師だったので、小さな家は満員になった。

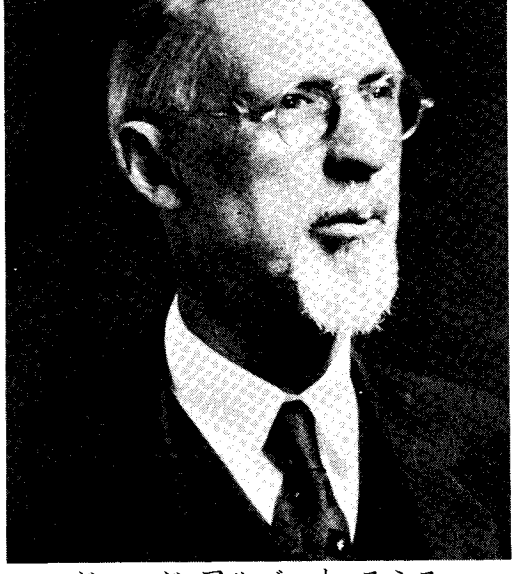
真夜中頃、外でひどい叫び声がして私たちは目を覚ました。何事かとベットに起き上がると、汚ない言葉が耳に飛び込んできた。明るい月夜で、外には大勢の人が見えた。キンボール長老はぱっとはね起きて服に着換え出した。男たちは玄関の戸をドンドン叩いて、汚ない言葉を口にしながら、モルモンは出て来い、撃ち殺すぞと叫んでいた。キンボール長老は起きて着換えないのかと言ったが、私は『いや、このままベットにいる。主が守って下さるはずだ』と返事した。するとそれから数秒もたたぬうちに、部屋に弾丸の雨が降ってきた。暴徒は4つに分かれて、家の隅々をねらい撃ちしているのだ。あちこちの方角から破片が頭上を飛びかかった。しばらく静かになったかと思うと、また一斉射撃が始まり、前にもまして粉々の破片が舞った。しかし私はまったく怖さを感じなかった。非常に落着き払って横たわりながら、一生にもめったにない恐ろしい出来事を体験していた。私は確信していた。神のみ言葉を宣べ、神の教えに従っている限り、主は自分を守って下さると。そしてそれはその通りだった。（ハートショーンP. 241）

## デビッド・O・マッケイ

1899年5月28日、スコットランドの大会に関連して思い出深い神権会がグラスゴーで開かれた。それはスコットラ



ヒーバー・J・グラント



ジョージ・アルバート・スミス

デビッド・O・マッケイ

ンド伝道部のスピリットとその地で働く人々の愛と一致を物語るものであった。

マッケイ大管長が日記に記した出来事の中から抜粋してみよう。

「平安な天よりの力が部屋いっぱいに広がった。何人かの長老がそれに感動して、涙を流しながら心の思いを語った。

ヤング兄弟が報告を終えて着席したとたん、チャールズ・ウールフェンデン長老が『兄弟たち、この部屋には天使がいます』と言った。満場の人々はその場にみたまを感じ、神よりの力を感じて、その言葉は確かだと証できた。長老たちは喜びに泣き、そこかしこからむせび泣く声が聞こえた。それも似つかわしかった。あの場では泣くことが雄々しく見えたのだから。

報告が終わると、全員が主の恵みと顕現を感謝して共に祈った。そのあとジェームズ・L・マクマリン伝道部長が挨拶の中でこのように言った。『主は私たちの働きを受け入れて下さいました。今私たちは主の前に罪なくして立っています。』

そしてさらに続けて、『兄弟たち、確かにこの部屋には天使がいます』と。その言葉に驚く者はいなかった。まったくその通りだと思われた。彼はふたりの兄弟を指して彼らの守護天使がいると言い、それから私に向かって言った。『デビッド兄弟、あなたにお話したい。サタンはもみがらのようにあなたを翻弄しようとしているが、神はあなたを心にかけておられます。信仰を守ったなら、あなたは教会最高の評議員会にも席を占めるでしょう』と。」

## ジョセフ・フィールディング・スミス

「1899年3月17日、ロレンゾ・スノー大管長により伝道に召された。私は召しを受け入れ、大英帝国で伝道すべく任命された。兄弟のリチャーズも同時に同じ場所の伝道に召され、私たちは一緒に旅をした。

1899年5月12日午後、私は父ジョセフ・F・スミス大管長の手で、七十人に按手聖任された。……

6月2日、私たちはアイルランド沿岸に到着し、初めてこの目で故郷の姿を見た。船内での私たちの言動は評判になっていたらしい。それというのも、なぜタバコや酒を飲まないのかと何人かから聞かれたからである。私たちはそれを機会に知恵の言葉のことを説明した。

6月3日、片側にアイルランド、片側にウェールズを見た。フィラデルフィア出発のちょうど2週間後、リバプールに到着した。本部に連れて行かれてから、私たちは別々の地方に割当てられた。私はノッティンガム大会に、一緒に来た兄弟のリチャーズはリーズに派遣された。

私は6月4日午後4時にリバプールを発ち、同夜7時半、ノッティンガムに着いた。出迎えの長老はおらず、伝道本部へ行くとドアに鍵がかかっていた。私はトランクを戸の外に置くとその上に腰かけた。すると通りで遊んでいた2、3人の子供が集まってきて、歌い始めた。

ちょいとねえさん、おいらを追っぱらっておくれ
モルモンが胸を張れる　ソルトレークシティーへ

私が通りへ出て行くと、子供たちは皆クモの子を散らすように逃げて行った。それが伝道部での歓迎第一陣だった。

6月6日は人生でも非常に大事な日だった。1カ月足らず前に、この大英帝国という国に福音を宣べ伝えようと家

を出てきたのだが、この国の町並みはくねくねとして故郷の町とは違っていても、私たちのチラシ配りは、けっこうまくいった。伝道に出て初めての訪問で25軒の家をまわったが、多くのドアが目の前でバターンと閉められ、何度も侮辱を受けた。しかしそれは皆私にとって何かの益になったと思う。

街頭で何回も集会をした。10キロから13キロも歩いたものだ。22キロ歩いたこともよくある。私たちはどこかへ徒歩で行くことを何とも思わなかった。伝道に来て以来一番歩いたのは、と言ってもいつも歩いていて、何かに乗った経験は一度もないのだが、スタフォードシャーのアトクスターからダービーを通ってノッティンガムまでだった。午前6時に出発してノッテンガムに着いたのはその日の真夜中の12時まで、まるまるの距離を歩き通したわけだ。

集会ひとつ開くのに、19キロや22キロ歩くのはわけなかった。本部から16キロ、23キロ離れた町々に教会員がいて、彼らに会いに行くのは何でもないことだった。伝道中にバスに乗ったことなど一度も記憶にない。ただ歩いた。……

私は主がこの経験を与えて下さったことを、いつも感謝することだろう。」（ハートショーンP. 318－320）

## ハロルド・B・リー

リー大管長は音楽を愛した。もっぱら楽器に堪能であったが、十代後半には声楽の才も伸ばした。のちに合衆国西部諸州伝道部に宣教師として召されたときには、音楽的才能が伝道の良い道具となった。

リー長老のチラシ配りの同僚はウィリス・J・ウッドベリーという名前で、いつも片手に黒表紙の聖典の束、片手にチェロを持っていた。ふたりは機会を見つけては立ち止まり、ケースを開いて店をひろげた。ウッドベリー長老がチェロの弓を弾き、リー長老はそれにあわせて静かに歌った。そのおかげで聞き手は福音を聞く用意ができ、受け入れやすくなった。リー長老は宣教師や教会員仲間の間では生まれついての指導者で、彼から影響を受けてバプテスマを受けるまでに至った人は40人を超える。（プレストン・ニブレー　The Presidents of the Church「歴代大管長」〔英文〕P. 437）

## スペンサー・W・キンボール

スペンサー・W・キンボールは、合衆国中部での伝道時代は活動的で立派な宣教師であった。しかし私たちにとって、当時の経験談にもまして大切なのは、主の予言者として今日伝道事業について語った次の言葉である。

「伝道を行なう最大の理由は、福音を聞きまた受け入れる機会を世の人々に与えることであろう。聖典は福音を宣べ伝えることについての命令とそれに伴う約束、それを果たしたときに受ける報いで満ち満ちている。私はこの「命令」という言葉を意識的に用いた。なぜならこの言葉は、いかなる人といえども逃げられない断定的な指令といった意味をはらんでいるように思えるからである。

現在教会には18,600人の宣教師がいる。この数は増やせる。はるかに多く。……能力がありふさわしい者は、すべてその肩に十字架を背負わなければならない。キリストについて、またキリストが十字架にかけられたことについて教える軍勢を必要としているのである。」
（「聖徒の道」1974年11月号、P. 482,3）

ジョセフ・フィールディング・スミス

ハロルド・B・リー

スペンサー・W・キンボール

# テマラマ の いちばんうれしい日

ドイル・L・グリーン／え：ジェリー・ハーストン

これはテマラマというとても信仰のあつい女の子の、ほんとうにあった話です。テマラマという名前は、南の海のバヒタヒという小さな島に住むこの女の子にぴったりの名前でした。テマラマは「光」という意味だからです。

タヒチ伝道部で宣教師として働いていたとき、わたしはこのバヒタヒ島に行くように言われました。そして同僚といっしょになん週間か、ココナッツの木の葉をあんで造った小屋に住んでいました。そのとき、すぐそばに住んでいたのがテマラマとその家族でした。

わたくしは伝道に出たばかりでしたので、言葉がよくわかりませんでした。けれどもこの８さいの女の子がわたしの先生となって、いろいろ教えてくれたのです。何かを手に持っては、それをタヒチ語で言い、わたくしはそれをまねて言います。たとえばいすを持ち上げて、パラヒラアと言うのです。わたしがまねて言うのを聞きながら笑ってまちがいをなおしてくれます。こうしてわたしは正しく言えるまで何度も何度もくり返して練習しました。

それればかりでなく、テマラマはわたしがタヒチ語のモルモン経を読むときも助けてくれました。こうしてわたしたちは言葉をいっしょに勉強し、また人を訪問したり、集会に行ったりして、とても親しい友だちになりました。

ある日のこと、わたしたちはココナッツの木の下にいました。何人かの人々もそばで話していました。テマラマがわたしの手を取って、言葉の勉強をしようと言います。するとそばにいたひとりがテマラマをからかいました。「テマラマ、プロテスタントの女の子がモルモンの宣教師の手を取ったりして。」

その人はただからかっただけでしたが、テマラマの心は悲しさでいっぱいでした。いそいで手をひっこめたテマラマのほおは涙でぬれていました。あとになってわかったことですが、テマラマのお母さんはこの教会の会員でした。けれどもお父さんはそうでなかったので、テマラマがバプテスマを受けることを許してくれなかったのです。

テマラマはプライマリーにも、日曜学校にも、またそのほかの集会にも行きたくてしかたありませんでした。歌が好きで、讃美歌をいくつもおぼえていました。この教会がほんとうの教会だということも知っていました。そして8さいの誕生日を迎えてからずっとバプテスマを受けさせてくれるようにお父さんにおねがいしているのに、いつも「だめだ」と言われていたのです。

テマラマは目に涙をいっぱい浮かべながらも、にっこりしてこう言いました。「でも、もうすぐ、天のお父さまの教会の会員になれるときがくると思うの。だからそれまで待っていてください。」

わたしはバヒタヒ島から別の島にうつり、テマラマも学校に行くためにタヒチ島に行きました。そしてあるとき、わたしはテマラマがバプテスマを受けたということを耳にしたのです。あとになって、テマラマがどのようにバプテスマを受けたかを知りました。

テマラマの信仰と証はしだいに強くなり、ますます教会に入りたいという望みが大きくなりました。ある日テマラマはお母さんに言いました。「末日聖徒イエス・キリスト教会の会員になれないなら、わたし生きていたくないわ。この教会はほんとうの教会なの。だから、お父さんがバプテスマを許してくれるまで何も食べない。でも心配しないで。」

お母さんはもちろんそのことをお父さんに話しました。あの子がそんなふうにまで考えているのなら、バプテスマを許そう。」お父さんはこう言ったのです。

数日後、テマラマはタヒチの山から流れるきれいにすみきった小川でバプテスマを受けました。そして翌日の日曜日、伝道部長や宣教師、支部の長老たちの手がテマラマの頭にのせられ、テマラマは聖霊を受け、教会の会員に確認されたのです。テマラマは、この日はこれまででいちばんうれしい日だったことを、あとでわたしに話してくれました。

わたしはこのこほど強い信仰を持ち、教会に入りたいという強い望みを持った人を知りません。

何週間かすぎた頃、伝道部長から一通の手紙が届きました。わたしと同僚に伝道本部に来て、長老大会に出席するようにというのです。伝道本部に着き、玄関のところに立っていると、テマラマがはだしでぬかるみをばしゃばしゃとやって来るではありませんか。門を入って、わたしを見たかと思うと、階段をいっ気にかけ上がって来ました。そしてひと息つくなり、タヒチ語でこう言いました。「イアオラ　ナ　オエ（ごきげんよう）。」

わたしも「イア　オラ　ナ　オエ、テマラマ　イー　メア　マイタイ　マネイ　オエ（元気？）」と言いました。

「すごく元気です。」テマラマはそう答えると、「わたしのこと聞きましたか」とたずねました。

わたしがこっくりうなずくと、テマラマの大きな茶色の目から涙があふれました。テマラマは、にっこりしてこう言いました。「もうわたしはあなたの手をとってもだいじょうぶですね。」

「もちろんだよ、テマラマ。」そう答えた私の目も涙でぬれていました。

# ウシガエルのブーマー

おはなし：ダウン・アセイ
え　：パット・マチン

なつがくると、いけではゆうがた、カエルの大がっしょうがはじまる。もりのどうぶつはみんな、やつらのかるいリズムを聞きながらねむるんだ。ルルルルル……ウルルルル…

がっしょうだんにはブーマーというウシガエルがいて、そいつがスターだった。やつのバスはすばらしいもので、あれがなけりゃ、がっしょうにもあじがない。おたまじゃくしからカエルになったばかりのやつらは、みんなブーマーにあこがれていたものだ。

ある日、にんげんがいけにやってきた。がっこうの先生が子どもたちをつれて、しぜんかんさつにきたんだ。きけんはなさそうだったが、カエルのやつらはいそいで水の中にとびこんだ。

先生がなにかしゃべっている。それから、みどりの水ゴケやガマがしげっているところをゆびさした。そこは、カエルのたまごがかえるところなんだ。
それから、ブーマーのほうを見た。

「ほら、あそこに。大きなウシガエルがいるでしょう。つよそうなうしろ足と、りっぱなのどを見てごらん。あののどで、すばらしい声を出すのです。いけの大スターですね。」

もちろん、ブーマーはみんな聞いていた。にんげんがいったとおり、ブーマーののどは大きくふくらんでいた。ブーマーは力いっぱい、ブブーーム、ブーーームとないた。

その日からだった、ブーマーがうたわなくなったのは。ブーマーはじまんした。「おれは大スターだ。」

がっしょうだんは、うたいつづけていた。しかし、もうだれも、やつらのうたを聞かなかった。なぜって、そのとおり、ブーマーがうたわなくなったからだ。

ある日、がっしょうだんのしきしゃがいった。「ブーマー、……そのお……大スターくん。もうぼくらとうたわないのかい。」

「声をだいじにしなけりゃ。」ブーマーはこたえた。

ブーマーはいつも、じっとおなじところにすわっていた。

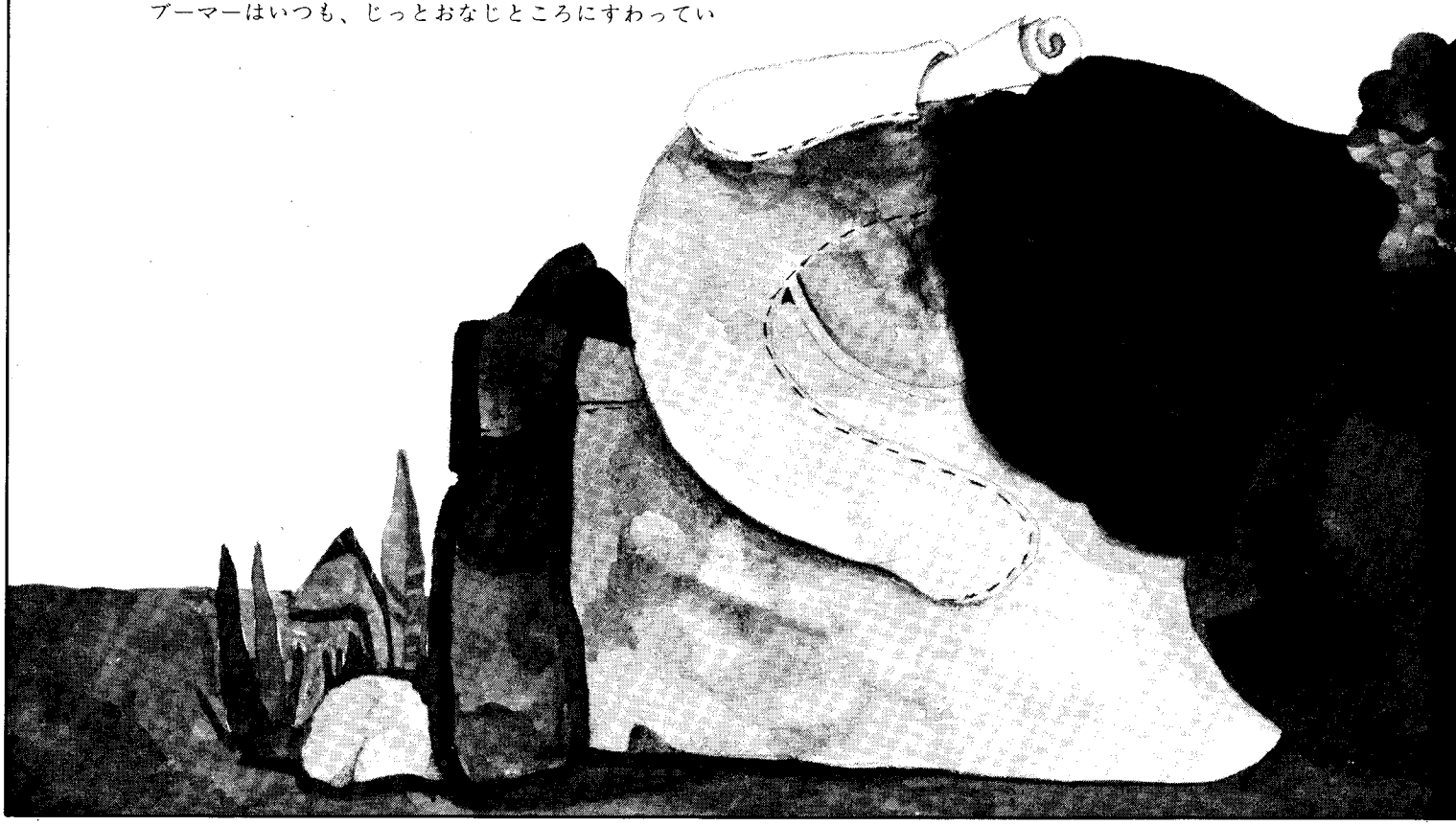
「大スターくん。もう、とんだりはねたりしないのかい。」カエルたちはたずねた。

「つよいうしろ足をだいじにしなけりゃ。おれはカエルの大スターなんだ。しっているだろ。」ブーマーはこたえた。

なん日もたつうちに、ブーマーはだんだんやせてきた。もう、いけのまわりをとびまわることも、ハエやカをつかまえることもできなくなった。つかまえようとおもっても、したがとどかないんだ。

まいにち、まいにち、ブーマーはすわったまま、じぶんをほめてくれるにんげんを、まっていた。やつは、声も足もつかわないで、だいじにとっておくことにきめたんだ。のどだって、ようがなけりゃ、ふくらまさなかった。

カエルたちは、もうすっかりブーマーのことなんかわ



すれてしまった。なぜって、ブーマーはだまってすわっているだけだから、石ころかなにかとかわらなくなってしまったからだ。

そんなある日、またにんげんが、いけにやってきた。がっこうのせいとと、先生だった。先生は、おたまじゃくしや、水ゴケや、ガマの穂をゆびさした。

それから、ブーマーを見ていった。「あれ、あそこに、おかしなカエルがいますね。むかしは、いけの大スターだったんでしょうけれど、きっと今はびょうきなのです。見てごらんなさい。かわがあんなにたるんで、あんなにやせています。うしろ足もよわそうですね。あのカエルはもう、うたえないでしょうね。」

それを聞いたブーマーは、のどをふくらませて、うたおうとした。しかし、出てきた声は、うたにもならない、しゃがれ声。

にんげんたちがいってしまうと、ブーマーは、かなしそうにいわの上にすわってかんがえた。「声をもとどおりにする、いいかんがえはないものかなあ。」それから、いけのふちまでとぼうとしたんだ。バシャン！　やつは水の中へおっこってしまった。

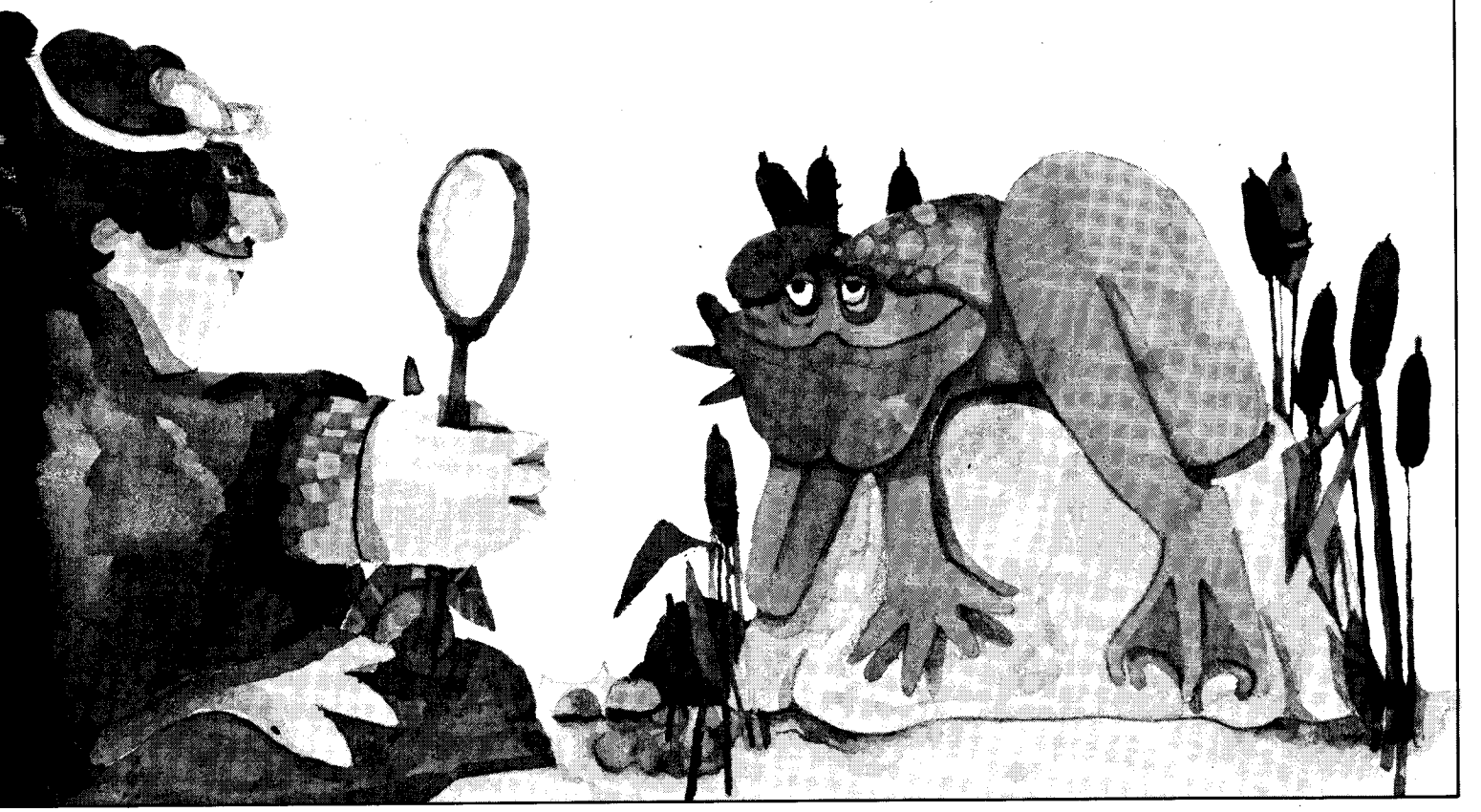
「うーん、すっかりよわっちまった。この足も、どうにかしなけりゃ。」ブーマーはかんがえた。

「どうしたらいいんだ。」あわれなブーマーはつぶやいた。「おれは、もう大スターなんかじゃない。声もよくないし、足もつよくない。また、もとどおりになれたらなあ。」

それからだ！　ブーマーはジャンプのれんしゅうをはじめることにしたんだ。えさもたくさんたべて、うたって、うたって、うたった。なんども、なんどもれんしゅうしたんだ。そうすると、だんだん、だんだん足もつよくなり、声もよくなってきたんだ。なん日もなん日もかかった。だけど、ブーマーはついにやった！　もとどおりにうたえるようになったんだ。

「声をよくしようとおもったら、いつも、れんしゅうしなけりゃだめさ。」あるばん、れんしゅうのあとで、ブーマーはこういった。

ルルルルル……、ウルルルル……、ほかのカエルたちも、みんなうなづいた。ほんとにそうなんだね、みんな。



# マリアのかいしゅう

おはなし：ミルドレッド・J・ウィマー
え　：ニナ・グローバー

マリアはカルニセリア（肉屋）の前にならんで、自分のばんをまっていました。マリアは、今、パナデリア（パン屋）に行ってきたばかりです。かごの中には、大きなパンがはいっています。マリアは、すぐ前にならんでいる女の人のことばを聞いて、うれしくなりました。

「このごろの若い人で、ちゃんと肉がえらべる人は少ないのよ。それなのに、ごらんなさい。マリアはあんなによく、肉屋さんのほうちょうさばきを見ているわ。」

『私、お母さんのかわりに、買い物をしてあげるのが大すき。』マリアは心の中でそう言いました。そして市場を出て、家へいそぎました。かごの中には、大きなパンと肉のかたまりがはいっていました。

家に帰ると、お母さんがだいどころで夕食のようういをしていました。

「ほう、ちょうど10時だ。あついなあ」と、家の中へつめたい水をのみにきたお父さんが言いました。そして、お父さんとお母さんとマリアは、マリアの学校のことや、お天気のことや、いろいろなことを話しました。マリアは土よう日がすきでした。家族みんながいっしょにいられるので、とても楽しいのです。

そのとき、げんかんの戸をたたく音がしました。マリアはまどのところへとんでいって言いました。「なにか、ごようですか。」

そこには、きちんと白いシャツを着て、ネクタイをしめた、ふたりの若い男の人が立っていました。ふたりの男の人は、「お父さんとお話したいのですが」と言いました。

「お父さーん」とマリアはよびました。お父さんとお母さんが、まどのところへ来ました。そして、お母さんが、この人たちは、きのう来た人だとせつめいしました。お母さんは、その人たちに、お父さんがいるときに、またおいでくださいとたのんでおいたのです。

「どうぞ、中へ」お父さんは、ドアをあけて、ふたりの男の人を中へあんないしました。

ふたりの男の人は、お父さんに、おいのりをしてもいいですかと聞きました。お父さんは「はい、おねがいします」と言いました。マリアはふたりのおいのりを聞いていると、目からなみだがでてきました。そのおいのりは、マリアが天のお父さまとお話しするときのおいのりとおなじだったのです。それまでマリアは、声を出してそんなおいのりをするのを聞いたことがありませんでした。

その男の人たちは、自分たちのことを長老とよんでいました。そして、父なる神さまと御子イエス・キリストとお話しをし、教会をそしきした男の人について話しました。そして、「このことがぜんぶ真実であることを知っています。今も、ちじょうには予言者がいます。ジョセフ・スミスがそしきした教会の大管長が、その予言者なのです」と言いました。マリアのしんぞうは、とび出しそうに、どきん、どきんとなっていました。

マリアの家族は、長老たちがくる日を、いつも楽しみにしていました。マリアはプライマリーが大すきでした。家族みんなで日よう学校や、そのほかの集会に行くのは、もっとすきでした。マリアの家族は、まい朝、まいばん、家族のいのりをしました。また、自分ひとりでも大きな声でおいのりしました。長老たちは神殿のこともおしえてくれました。そこで家族は、えいえんにむすびかためられるのです。

バプテスマの日が来ました。みんな、きれいな白いふくを着ました。さいしょにお父さんがバプテスマをうけました。つぎはお母さんでした。そして、そのつぎはマリアです。長老が手をとってくれました。そしてもういっぽうの手を上にあげて、みじかいおいのりをしました。

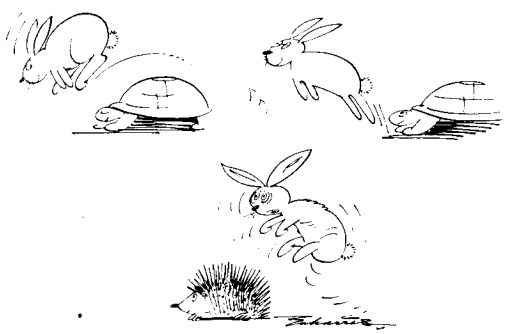
水の中からあがると、マリアは心の中があたたかくなりました。もうほんとうに、末日聖徒イエス・キリスト教会の会員なのです。今では、友だちにあうことに、福音をおしえてあげています。マリアは友だちに、福音のことを話すのが、楽しくてしかたがないのです。

# どの魚？

太郎がつった魚は
どれでしょう

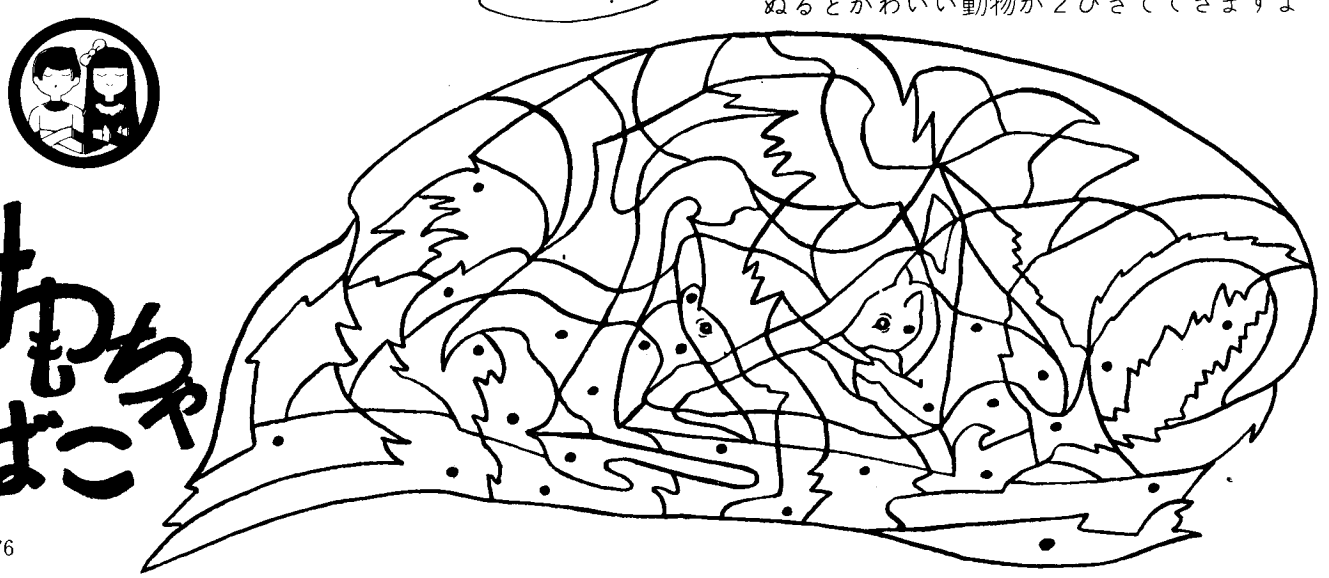
## てんをむすびましょう

キャロル・コナー



## ぬりえ

てんのついているところキャロル・コナーを
ぬるとかわいい動物が２ひきでてきますよ



# おもちゃばこ

# 質疑応答？

ここで与えられている解答は、解決の一助となるものであり、教会の教義として公式に宣言するものではない。

**「どうして日の栄の王国に入るように努力しなければならないのでしょうか。両親がそう望むからですか。入らない場合にどうなるかわかっているからですか。主を愛するからですか。それともそれが正しいことだからですか。」**

主が御自分でそうおっしゃったから、つまり私たちはまず主と主の教えを信じ、愛するからです。主はこう言われました。「まず神の国と神の義とを求めなさい。そうすれば、これらのものは、すべて添えて与えられるであろう。」（マタイ6：33、IIIニーファイ13：33）これは何という祝福でしょうか。主を信じるというのは、主のみ言葉を聞き、み言葉を信じ、み言葉を行なうことです。予言者ジョセフ・スミスのこの世での使命は、ただ「主が命じられたときに、それを行なう」ことでした。(Documentary History of the Church「教会歴史記録」第2巻P.170)

私たちはなぜ主を信じるのでしょうか。それは、主が完全な愛に満ちた全知全能の恵み深い神で、子供たちを祝福し、喜びと栄光のすべてを与えたいと願っておられる天の父だからです。私たちは心に語られるどの声にもまして、主のみ声と主のみ言葉と主の予言者を信頼しています。

父親と並んで、遠くにいる牛の群れを見張っていた少年の話があります。目の良い父親が「ずっと北の野原に牛がいるぞ」と言うと、少年の目にはそれが見えないのに、「そうだね。牛がいるね。父さんが言うんだもの」とつぶやいたのです。

主は私たちに、まず神の国を求めよとなぜ言われたのでしょうか。その理由のひとつだと考えていることを、お話したいと思います。私は、日の栄の王国に入る場所というだけでなく、自分の霊の質や状態をもさすと思います。キリストのような属性と特性を持った日の栄の人々が日の栄に入るのです。（教義と聖約88：20—41）質問の初めの部分を言い換えると、どうしてキリストのような聖い人格を持った日の栄の人になろうと、努力しなければならないのでしょうか、というふうになります。1973年10月の総大会で、リー大管長が霊感にあふれた開会説教をされましたが、私はその説教を聞いて、私たちはみんな成長すれば神のようになれるという可能性を持った神の子供たちだということを、今さらながら知りました。私たちは祝福師の祝福や生ける予言者や聖典や聖霊によって、自分が今よりもさらに良い自分になれるという証を得ます。イエス・キリストの贖罪の犠牲とイエス・キリストの福音に対する従順を通じて、私たちは神の性質にあずかることができるのです。（IIペテロ1：1—11）

死すべき身の私たちは、いつかきっと見えるようになるという希望を持ちながら暗闇の世界にいるめしいのようだと思います。目が見えないので日の栄の王国での生活を経験はできませんが、その一端をかいまみることはできるでしょうし（偉大な人々の生活を光として、奉仕というすばらしい時間を通して、等々）、みたまの証やみたまの実在を感じて、まだ完全に知ってはいないことのために努力しようという望みを持つこともできます。「日の栄の王国のようなまだよく知らないことのために、どうして努力しなくてはいけないのだ」と考える人があるでしょう。コリント人への第一の手紙2章9節には、こう書かれています。「しかし、聖書に書いてあるとおり、『目がまだ見ず、耳がまだ聞かず、人の心に思い浮びもしなかったことを、神は、ご自分を愛する者たちのために備えられた』のである。」おわかりでしょうが、日の栄のキリストのような生活こそ、主が言っておられることのすべてだということを、人々は知って証しています。

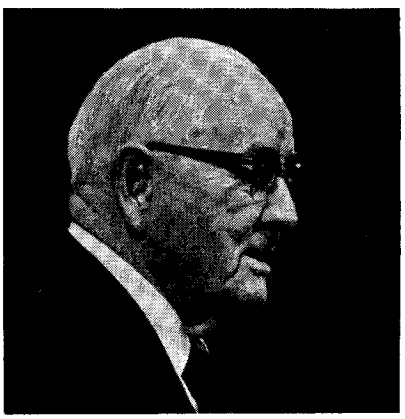
太陽の輝きに浴せると知りながら、月の光で満足する人がいるでしょうか。（教義と聖約76：70）伴侶や子供や愛する人々と共に永遠の愛と栄光の中で限りなく殖え続けられると知りながら、永遠にひとりぼっちの状態に満足できる人がいるでしょうか。（教義と聖約 132：22）非常に多くの人たちを永遠に高め、助け、喜ばせる神聖な力を持ったキリストのような人格になれるというのに、わずかな奉仕の力しか持たない自分に満足する人がいるでしょうか。

そこで大事なことは、リー大管長が知っておられること、彼以前の予言者たちが知っていたこと、イエス御自身が教えられたことを自分も知ろうと努めることです。「永遠の命とは、唯一の、まことの神でいますあなたと、また、あなたがつかわされたイエス・キリストとを知ることであります。」（ヨハネ17：3）どうして日の栄の王国に入るように努力しなければならないのか、そのわけは、主がそう言われたから、そして私たちは主を信頼し、愛し、その戒めを守るからです。

**ジョン・コーベイ**
**ブリガム・ヤング大学**
**組織管理学部助教授**

# 神は欺かれず

1974年10月4日(金)半期総大会午前の部における説教



大管長
スペンサー・W・キンボール

兄弟姉妹、友人の皆さん、この大会でお会いできることを心から喜んでいる。願わくは、この大会で語られるすべての事柄から、励ましと霊感を受けられるように。

私たちは記者会見のたびに、「ところで、教会の状態はいかがですか」という質問を受ける。そして私たちはそのつど、「教会は順調に大きく、強くなっています」と答えている。

現時点で、ステーキ部の数は全世界に661を数える。私が教会本部に入った1943年には148しかなく、また海外にはひとつのステーキ部もなかった。教会が大海を越え、大陸に至るまで、私たちは何年も待たなければならなかった。しかし、ロムニー副管長が1958年5月にニュージーランドのオークランドにステーキ部を組織されたのを皮切りに、現在では86のステーキ部を数えている。1943年の時点では、宣教師の数、活動共に小規模であったが、現在は112の伝道部、661のステーキ部、伝道部を擁し、約1万8000名の宣教師を派遣している。着実に成長の歩みを進めるこの姿に私たちは喜んでいる。

私たちがなぜこれほどまでに恵みを受けているのかと言えば、それは、「私たちにはすべてのものがあるからである。すなわち、あらゆる機会に満ちた人生、死を恐れない確信、成長、発展が、とどまることのない永遠の生命があるからである。」

世界の四方より人種を問わず集まった330万人の会員と共に、私たちはまた新たな成長と発展の年を迎えようとしている。

私たちは集会につどい、それぞれに責任を果たすべく努めている。神殿への参入者数は増加の一途をたどり、そこで行なわれた儀式の数は、私たちが霊的に大きく成長していることを示している。大学、インスティチュート、セミナリー、その他定例集会でのレッスン、これら教育プログラムも満足すべきものがある。かくして、さらに広汎な知識と確固たる証が築かれている。

世の多くの教会が教会堂の建築を差し控え、あるいは断念している現今、私たちの建築プログラムは全世界で進展の一途をたどっている。ほとんど毎日のように新しい教会堂が建ち、忠実な人々で埋められている。

しかしながら、私たちはこれで満足しているのでも、自慢しているのでもない。救い主が言われた言葉を胸に抱いてなお前進しているのである。主は言われた、

「もしわたしの言葉のうちにとどまっておるなら、あなたがたは、ほんとうにわたしの弟子なのである。

また真理を知るであろう。そして真理は、あなたがたに自由を得させるであろう。」(ヨハネ8：31，32)

私たちは主の崇高な祈りを忘れてはならない。

「わたしがお願いするのは、彼らを世から取り去ることではなく、彼らを悪しき者から守って下さることであります。

わたしが世のものでないように、彼らも世のものではありません。

真理によって彼らを聖別して下さい。あなたの御言は真理であります。」(ヨハネ17：15－17)

兄弟姉妹の皆さん、私たちは美化キャンペーンに着手した。私たちは多く

のものを打ち捨てる民である。人口の増加よりもはるかに早いスピードでゴミはたまってゆく。そこで皆さんに家の内外をきれいにするよう求めたい。「人は土地の管理者であって、所有者ではない」のである。

壊れた囲いは修繕するかさもなくば除去し、使わない納屋は修善し、屋根をつけ、塗装し、あるいは処分し、家畜小屋は修善し、ペンキを塗るかあるいは処分し、溝渠の除草をし、人の住んでいない建物は壊すべきである。都会、郊外を問わず私たちの社会の全域にわたって、納屋、家畜小屋を清潔にし、修理し、塗装し、歩道を作り、除草をして、私たちの財産を目に麗しいものとしていただきたい。

若人のグループ、補助組織、神権定員会に対して、この美化運動を強力に推進するよう依頼している。

主はこのように言われた。

「地と、それに満ちるもの、世界と、その中に住む者とは主のものである。」（詩篇24：1）

「われ主なる神、かの人（アダム）をとり彼をエデンの園に置きてこの園の手入れをなさしめ、またこれを守らしめたり。」（モーセ3：15）

私たちは皆さんの手にある財産を美しく飾り、保護するよう強くお願いしたい。

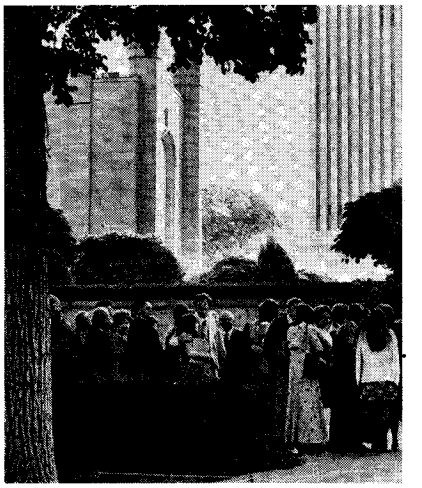
私たちはいわゆる一夫多妻主義に関して警告したい。これはあなたがたを真理から迷わせるものである。主は数十年前に予言者を通してこの計画に終止符を打たれた。そして予言者はこの啓示を全世界に宣言した。あなたを欺き、大きな悲しみと悔いを与えようとする人々がいる。これら邪な道を教える人々といかなる関係も持ってはならない。主の言葉を無視することは誤りであり、罪である。主はこのことについてすでに断言しておられる。

子供たちに名誉と高潔、正直を教えていただきたい。私たちの子供のうちで、盗みがどれほど罪深いことか知らない者は全くいないと言い切れるだろうか。破壊的な行動、盗み、強奪などの蔓延には信じがたいものがある。家族を正しく教育し、この潮流から守っていただきたい。

兄弟姉妹、私たちはこの民に、忠実であるよう教えている。「われらは、王、大統領、統治者、長官に従うべきを信じ、また法律を守り、敬い、支うべきを信ず。」（信仰箇条第12条）常に忠実であり誠実でありなさい。

私たちの教会の最も大きな特徴といえば、それは、教会員がアルコール飲料、茶、コーヒー、タバコを断っていることであろう。この計画に従う勇気と証を持っていない者もいくらかはいるが、大多数がこれを厳格に守っている。

現代の予言者を通じて多くの神よりの啓示が与えられているが、そのひとつに知恵の言葉として知られている内容を盛った教義と聖約89章がある。現在に至るまで141年間、私たちはこの啓示が伝える偉大な真理を実践してきている。すなわちブドウ酒と強き飲料を避け、茶とコーヒーは体のためにならず、いかなるタバコもたしなまず、ただ打身とすべての病める家畜にきく薬草であることを知っている。（教義と聖約89：8参照）



最近「何かを始める日」を設けているミネソタ州のある町で、公共機関を通じて人々に禁煙を勧めたというニュースを耳にした。そして1月7日にそれを実施し、271人が禁煙を実行したと聞いている。このように物事に目覚めている社会とその指導者たちに賛辞を送りたい。

さて、ここ数年来私たちは、この知恵の言葉により制限されているものを飲用することが、数え切れないほど多くの疾病の原因となっていることが医学界から報告され、共感を呼んでいる。私は親しい友人の病床に立ち、彼がガンで他界したのを目にしたことがある。医師の話によるとタバコが原因となったということであった。私はまたアルコールという悪魔に殺された人々の埋葬を手伝い、だれもが喫煙し酒を飲んでいるからという理由でそれに深まり、死んでいった多くのお人よしの墓を見てきた。

アルコール飲料は関係のない人々にまでも多くの悲しみ、苦痛、苦悩、死

をもたらしている。社交上でしか酒をたしなまない人は、絶対にアルコール中毒にならないと言う。しかし、そう言い切れるだろうか。

知恵の言葉を破る者は、奇妙な、もっともらしい言い訳をならべる。どうして、現代の予言を通じて与えられた啓示を無視して、なお安じていられようか。主はこの啓示を別の予言者によって繰り返し、はっきりとした戒めとされた。

実業界ではアルコールを勧めるのをもてなしとする習慣があるが、私たちはこれを嘆いている。特にクリスマスの時期になると、多くの人々は主イエス・キリストの降誕を、いわゆる社交パーティーという形で、実はこれは主を侮辱していることなのだが、祝っている。人々は楽しい時を持とうとして酒を飲み、活力や自信を得るために酒を飲んでいるが、これは何と悲しい習性だろうか。

私たちは皆さんに、あらゆる種類の薬剤をできる限り避けていただきたいと申し上げる。精神安定剤や睡眠薬に頼る人が余りにも多い。これらは必ずしも必要ではないのである。

数知れない多くの若者がマリファナや麻薬の類で、心身を損ね、あるいは廃人化しているが、実に悲しむべきことである。

もうひとつ警告したいことがある。それは多くの人が安息日に日用品を買っているということである。もし私たちがこの日に買い物をしなければ、多くの店員職員が仕事から解放され、礼拝することができるだろう。しかし、多くの言い訳や詭弁をろうして、安息日に買い物をすることを正当化しようとしている。すべての人に申し上げる。安息日を聖く保ち、日曜日の買い物をしないように、と。

忠実な末日聖徒は、賭ける賭けないにかかわらずギャンブルに使うトランプ遊びをしないと思う。競馬、ゲーム、スポーツ一切に関してギャンブルをしないよう強く求めたい。

このことに関しては明朝の福祉集会で多くのことが語られるはずである。多くの人が親の責任をほかの機関に任せているが、これは全く遺憾である。

日用品の貯蔵に無頓着な人々もいる。教会のプログラムにあっては十分な資金と物資を貯え、緊急時に人々を賄えるようにしていただきたい。そして、援助を受けた人はそれに対して積極的に返済するよう強く勧めたい。監督の皆さんに申し上げる。援助を与えるにあたっては、けち、寛大いずれも度を過ぎないよう、また援助を受ける人は正直、公正さを備えた人であるよう見極めていただきたい。

食糧危機の時代が来ると、多くの人はビンに果物をつめ、庭を耕し、果物の木を植えておいて、日用の食糧だけは自給できるようにしておけばよかったと思うことだろう。

主は私たちがすべてのものから別個独立するよう計画された。だが農夫がミルクを買い、家屋と土地を持っている者が庭園野菜を店から買っている。やがて店の棚に品物がのらなくなったとき、多くの人々が飢えることであろう。

私たちは労働の大切さを知っている。十戒の第4番目に、「六日のあいだ働いてあなたのすべてのわざをせよ」（出エジプト20：9）と言われている。一方労働時間が急速に短縮されつつある現状は、一体全人類のためになるのだろうか。主はどういう意味でこれを語られたかを御存知だったと思う。私たちは遊ぶことや旅行することしか考えず、私たちの経済は、物見遊山にうつつを抜かす大衆、ゲームに興じる大衆、酒飲みの大衆に貢献しているように思われてならない。

私たちはさらに、家庭、店舗、レストランその他に非常な無駄を見ている。食事が終わると、多くの食物をゴミ箱に捨ててしまう。それは、恵まれない国でひと口の食べ物を求めている多くの人々を賄うことのできる量に相当する。多くの人々が飢えている一方で、私たちは多くを投げ捨て、無駄にしている。

私たちはこれまで、自分の家を持つよう会員たちに奨励してきた。自分の家を持つ人々の間にも安定している人とそうでない人とがいる。経済学者は再び苦難の時代が到来することを予測している。そのとき、全収入あるいはそれ以上を費やしている人々はどうするのだろうか。就職の機会がなくなり、収入が減らされたらどうするのだろうか。あなたは収入の範囲内で生活しているだろうか。事態が悪化したら支払えないような負債を負っていないだろうか。経済的な打撃を受けたときに、それを十分緩和するものを持っているだろうか。

食糧品の価格は高騰している。しか

し、失業して、収入が大幅に減少することを思えば耐えられよう。

娯楽施設に行って驚くことは、神の冒瀆が公然と認められていることである。戒めは言う。「あなたは、あなたの神、主の名を、みだりに唱えてはならない。」（出エジプト20：7）祈りと説教以外の場で、主のみ名を用いるべきではない。神の冒瀆は、かつて重罰を課せられる罪であった。冒瀆とは、力のない者の強がりである。

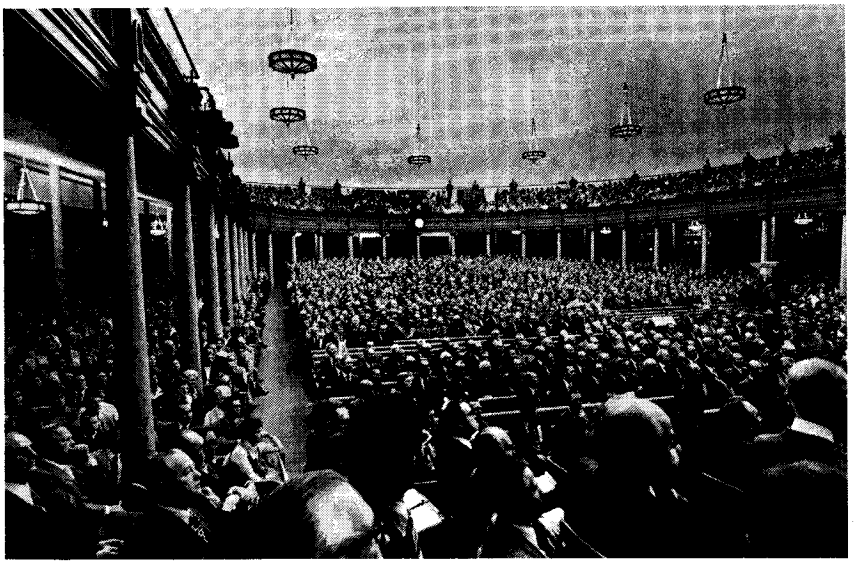
私たちの民の両親、指導者はポルノグラフィーに対して妥協を許してはならない。これこそ実はゴミであるのに、おいしい食物として売られている。作家たちは環境汚染に喜々としている観がある。これを法令で規制することはできない。ポルノグラフィーと性の放縦、倒錯には関連したものがある。私たちは性的興奮、ストリーキング、その他狂気の沙汰を崇拝する世界に住んでいる。人間の狂気は一体どこまで続くのか。私たちが世に染まらぬように守られることを主に祈る。相当な地位の人々が心と霊が汚染された地に投げ込まれている現状は真に悲しむべきものである。私たちの民すべてが全力を尽くしてこの醜悪な改革に足を踏み入れないよう呼びかけたい。

ポルノグラフィーが無害であるかのように主張する人がいるが、実に馬鹿げたことである。犯罪と関係があることは明白である。殺人、強盗、婦女暴行、売春、営利本位の策略は、この不道徳という思いによって培養される。性犯罪の統計は、犯罪とポルノグラフィーの間に一定の関係があることを物語っている。

ポルノグラフィーは社会価値を下落させる以外の何物でもない。家族はあらゆる手段を尽くして子供たちを守っていただきたい。私たちは何もかもが許される世界に住んでいるが、許す世界すなわち退化する社会に埋没しないようはっきりとした意識を持つ必要がある。自由を主張する世の多くの人々が実に不可能な自由を求めていることに私たちは驚いている。不道徳を許容しようとするすう勢が、この世代の人々の道徳意識を破壊してしまうのではないかと恐れるのである。

カリフォルニア州知事リーガン氏はこのように述べている。「我々はこの人道主義社会において被告人の持つ権利を擁護してきた。無実の人を罰すること以上に恐ろしいことはない。しかし、今や我々は罪人に対して過度の関心を集めすぎている。我々は罪人を犯人とは呼ばず、患者と呼んでいる。彼は病人かも知れない。しかし社会の生んだ敗北者である。社会が社会自体の罪に対して裁きを受けぬ限り、どうして彼はとがめを受け得ようか。」

私たちは犯人を罰すること、さらには子供をしつけることまでも、ひるみ、避けようとしている。合衆国の犯罪増加率は、人口増加率の9倍近くに達していると言われる。合衆国で過去2年間に生まれた第一子の三分の一は、結婚関係にない両親から生まれたと言われている。合衆国では1年間に約40万の私生児が生まれており、他の多くの国々もほぼ同じ数を見ている。高等学校を中退する女子生徒の約半数は妊娠のためである。さらにこの醜い概算は続く。毎年100万人以上のアメリカ人女性は不法な堕胎を行なっている。これはあらゆる罰のうち最も卑しむべきもののひとつである。厄介払いのために、体面を傷つけないために、あるいは楽をするために、生まれ来るべき子供を葬っているのである。この堕胎のために、毎年約8千人の女性が命を落



としていると言われている。また報告によれば、合衆国の大学生の死因で第一位を占めるのが自殺だそうである。

ある有名な作家によれば、「イエス・キリストはその道徳的厳格さのゆえに、もはや世の人々の心をとらえることがなくなってきている。キリストはその道徳的厳格さをもって、あらゆる行動を攻撃している。」キリストは安楽主義、ことなかれ主義を非難し、私たちの道徳的放縦を非難しておられる。また力に頼る私たち、愛を否定し、気高い人生を歩むことを拒む私たちを攻撃しておられる。私たちの社会は、安楽のみを愛する社会であり、安楽と文明とを同じものだと考えている。主の計画は厳格であることを天父と御子に感謝申し上げたい。

パウロはこのことをはっきりと述べている。

「きよい人には、すべてのものがきよい。しかし、汚れている不信仰な人には、きよいものは一つもなく、その知性も良心も汚れてしまっている。

彼らは神を知っていると、口では言うが、行いではそれを否定している。彼らは忌まわしい者、また不従順な者であって、いっさいの良いわざに関しては、失格者である。」(テトス1：15，16)

家庭は教育の場である。すべての父親は息子に、母親は娘に教えるべきである。その後子供たちが受けた助言を無視したとしても、子供たちには何ら弁解の余地がない。

道を踏みはずす両親の数に私たちは驚かされる。不信仰の結果招いた離婚、家庭の分裂の数を見るとき、私たちは教義と聖約に記されている基本原則に目を向けざるを得ない。

「汝……姦淫を犯すなかれ。……また何事にてもこれに類することを為すことなかれ。」(教義と聖約59：6)

万人に申し上げる。心と体を清く保ち、滅亡と大きな落胆をもたらす道に足を踏み入れてはならない。主は言われる。

「『姦淫するな』と言われていたことは、あなたがたの聞いているところである。

しかし、わたしはあなたがたに言う。だれでも情欲をいだいて女を見る者は、心の中ですでに姦淫をしたのである。」(マタイ5：27，28)

さて、心の肉欲、目と体の肉欲は大きな罰につながる。すべての男性は家庭に愛を持ちなさい。すべての女性は夫を支え、心をその属するところすなわち家庭に置きなさい。すべての若人は妥協を許そうとする誘惑から離れ、自らを強く律して性的不純という堕落から身を守りなさい。彼らは、なるべく早いうちから、完全に、そして何度も何度も悔改めをしなければならないだろう。

同性愛はいかなる形であれ罪である。ポルノグラフィーが罪に走らせる。ここにどっちつかずは存在しない。

ある人々は男らしさ女らしさという概念を無視し、あるいは堕落させ、また明らかに打ち壊そうとしている。男性のような服装、身づくろい、行動をとる女性が次第に増えている。一方女性のような服装、身づくろい、しぐさをする男性が増えている。この増大する中性主義によって人生の高貴な目的がくだかれ、損われている。神は御自分のかたちに人を創造された。すなわち、男と女に創造された。主は最もよきことを知っておられる。性を変える男女は創造主に対して償いをしなければならないだろう。

J・ルーベン・クラーク・ジュニア副管長の言葉をもって皆さんの注意を喚起したい。「私たちの文明とは、純潔、神聖な結婚、聖い家庭に基を置く。これらを打ち、滅ぼす者は、キリスト教徒といえども野獣と何ら変わるところがない。」(「大会報告」1938年10月P.137)

愛する兄弟姉妹の皆さん、あなたがたは信仰を試されている。あなたは指導者の言葉に耳を傾けているだろうか。

このすべてが許される世界の罪が若人に集中しているわけではない。私は映画の雑誌を読んでいて仰天したことがある。ある人が結婚について、単なる法律上の契約を負うだけのものであると述べ、次のように語っていた。「結婚制度は廃止すべきものである。そうすれば何ら社会的圧力もなく、ユートピアのようなところになるだろう。」彼から質問を受けたある女性はこう答えていた。「結婚なんて廃止すべきですわ。私は、結婚せずにふたりで静かに暮らしている人々を知っています。でも、そのような社会で成長した子供が悪い影響を受けるなんて見たことがないわ。」

こういった考えを持っているのは、結婚せずに同棲することを提唱している人だけに限られていない。私はこの

ことを私たちの民に力の限りを尽くして知ってもらいたい。

もう一度申し上げる。私たち教会員は結婚する。すべて正常な人は結婚すべきである。（多少の例外があろう。）すべて正常な結婚をしたふたりは親となるべきである。聖典はこう語っている。

「何人にても結婚を禁ずる者は神より聖職の按手任命を受けたる者にあらず、そは結婚は神の人に定めたるところなればなり。

この故に、人各々一人の妻を有つことは義し。而してこの二人の者一体となるべし。すべてこれは、この世の造られたる目的に適わんためなり。」（教義と聖約49：15，16）

地は結婚と家族なくして善しとされず、また存続し得ない。老若を問わず結婚をせずに性的関係を持つことは、主の目に憎むべきことである。悲しむべきことに、多くの人々はこれら偉大な真理に目をおおっている。

私たちはこれまで幾度となく、これら世につける有害な事柄について述べてきた。私たちが主の祝福を受けるために取り除かなければならないその他の事柄について手短かにまたはっきりと追ってゆきたいと思う。

夫婦は互いに愛しいつくしまねばならない。夫婦は特に不信仰、不道徳によって家庭を破壊に陥れてはならない。

片親だけで成長している子供のパーセンテージが日増しに高まっている。これは主のみこころにかなうことではない。主は父親と母親に子供を育てるよう望んでおられる。親から子供を奪う人は非常に厳しい質問に答えなければならない。主は片親でなく両親に対して、その子供を正しく教えないとき「罪その両親の頭に留るべし」と言われた。（教義と聖約68：25）　崩壊した家庭について正当な理由を申し立てることはむずかしい。離婚のほとんどは、利己心の結果である。裁きの日は迫っている。家族を見捨てた両親は、大判士の満足できるような弁解や言い訳を見つけることができないだろう。

繰り返し申し上げる。性を倒錯した男女は地を満たすことができない。彼らは弁解の余地なく罪に定められる。いかなる正当化も力を持たない。そして神はそれを赦したまわない。

堕胎に関して、私たちは今年生まれるべき何百万の子供が命を絶たれたという報告に悲しみを覚えている。このいまわしい罪に走った女性、そして時には罪がこれを生んだのであるが、彼女らを助けた人々は、必ず応報があることを覚えるべきである。天罰は必ず下る。

私たちは永遠にわたる結婚をする。私たちはこのことを真剣に考え、行なっている。私たちは両親となって、子供たちを世にもたらし、義のうちに育て、教える。

若人が家族を制限するために手術し、かなりの人がこの精管切除術を勧めているという報告に私たちはあっけにとられている。忘れてはならない。主の再臨は近い。愚かな説明や論理では満足しない聖なる判士は、ある人々に答えようにも言葉を見出せない質問をされるであろう。主は公正に裁きを下される。

なぜ私たちは自分の手の中に行く末をとどめてしまうのだろうか。開拓者時代に最初に粗末な小屋を築いたとき以来、真の文明は家庭と家族がその中心を占めていた。神より与えられた計画をゆがめる者は必ず悲惨な結果を招く。家族は共に働き、共に遊び、共に神を礼拝すべきである。

私たちは川の流れに浮くコルクのように、誤った考え、有害な道、悪魔の教えに行く末を任せることができるだろうか。私たちはだれにそそのかされるのか。安易な道をとり、「狭くて細い」道から、悲しみに至る安易で広い道に針路を転じるのか。（マタイ7：13，14参照）　私たちは愚かなことはしない。あなたは耳を傾けているか。あなたは中央と地方の指導者の忠告、勧告に従おうとしているだろうか。それとも、たとえ暗い荒野に通じる道であっても、自分の道を歩むだろうか。

愛する皆さん、神が祝福したもうように。天の声に耳を傾けなさい。神はまさしく生きておられる。神は公平であり、義の判士である。正義は同情、赦し、慈悲の前を進む。

神は天にまします。神は地球を組織されたとき、目的をもっておられた。そして今も同じくみむねを行なっておられる。神の戒めを破る者は自責と苦痛のうちに歯がみし、苦しむだろう。神は欺かれない。人が自由意志を持っていることは確かである。しかし、神は欺かれない。（教義と聖約63：58参照）

天父の律法に厳格に従って生活するよう、ここで勧告したい。イエス・キリストのみ名により申し上げる。アーメン。

# わが子よ、今宵なぜさまようのか

1974年10月6日、日曜日午前の部

第一副管長
N・エルドン・タナー

このうるわしい安息日の朝、皆様に話をするにあたって、主のみたまと祝福が終始私たちと共にあらんことをへりくだって祈るものである。

「今宵わがさまよえる息子はいずこに」という歌を、私はよく覚えている。皆様がたの中にも思い出す方がおありであろう。愛する予言者スペンサー・W・キンボール大管長がこの歌をしみじみと歌われるのを聞き、私たちも思わず涙を流したものである。その歌詞をここで読んでみたい。

今宵わがさまよえる息子はいずこに
　わが心の安らぎ、わが心の憂い
ありし日はわが喜び、わが光、
　われ愛し、祈る息子よ。

かの日は朝露のごと清らかに
　母の膝にたわむれし彼
面(おも)は輝き、心まことに、
　こよなくやさしき彼

おお、わが息子今宵いずこ
　今宵いずこに
わが心　思いにあふれむ
　彼を愛するがゆえ　汝こそ知れ
おお、今宵わが息子はいずこに

作者不詳

今朝私はこの言葉を置き換えて、「わが子よ、今宵なぜさまようのか」と、さまようすべての人々に問いたい。

辞典によれば「さまよう」とは、あてや計画や目的なしに行動したり旅行したりすること、流浪し漂泊すること、ふらついたりあてどもなく歩くこと、行動や意見を逸脱して迷い出ること、とある。

これらの定義を頭に置いて、「現代はなぜ、かくも多くがさまようのか」という疑問について話したいと思う。

遙かな昔から、人々は地上のあちこちをさまよい、多くの者が迷い込んだ荒野から抜け出す道を見い出せないでいる。「荒野」を辞書で引くと、無人の土地、道のない土地、人跡の絶えた荒廃地などの意味があるが、途方にくれてあてどもなく人生をさまよう人は、大切なこの世の時期に進歩するために与えられている貴重な時間を浪費しているのである。

だれでも人生のある時期に、行く先のあてがない幾ばくかの迷いを感じたことがあると思う。ある意味で、それは荒野をさまようことである。その迷いの原因を幾つか考えてみよう。

狡猾な悪人も加えて、サタンとその軍勢は、さまよう人を荒野に引き止め、やがてはその人を滅ぼして主のみ業を阻止しようとする。アダムとイブは主よりもサタンの声に従ったとき、史上初めての彷徨者となった。彼らはエデンの園から放逐され、神の戒めを守るようになるまで彷徨の時期を過ごした。

カインはサタンに従う方を選んだため、弟アベルを殺害する結果となったが、そのカインも放逐されて、罪の荒野をさすらうことになった。聖典ではまだ多くの人や多くの民が同じ道をたどっている。ソドムとゴモラは、義人の数が減って町を救う力がなく、住人の悪事のために滅びてしまった。ノアの箱舟の話はよく知られている。わずか8人を除く全地の住民が、主の教えや警告に耳を貸さなかったために滅びた話である。

神の戒めは人に人生の安全な道を示し、御父の王国へ連れ帰ってくれるものであるが、それに従うことの大切さを知らず、学びもしないために、荒野をさまよっている。彼らはペテロが言ったようにあざむかれ、悟らないでいるのである。

「しかし、民の間に、にせ予言者が起ったことがあるが、それと同じく、あなたがたの間にも、にせ教師が現れるであろう。彼らは、滅びに至らせる異端をひそかに持ち込み、自分たちをあがなって下さった主を否定して、すみやかな滅亡を自分の身に招いている。また、大ぜいの人が彼らの放縦を見習い、そのために、真理の道がそしりを受けるに至るのである。」（IIペテロ2：1，2）

またある者は、仲間の歓心を買おうとして悪いとわかっていることをし、禁じられた道にさまよい出ている。彼らは非難やあざけりに耐えられず、悪い事に抗しきれないのである。従ってそのような人は、仲間や道を踏み迷った

大人たちや、サタンのような狡猾な方法を四六時中うかがう悪人たちから、いつも大きな圧力を受けているのである。

救い主が地上を歩まれた時代にも、そのような彷徨者はいた。ヨハネはこのように記している。

「しかし、役人たちの中にも、イエスを信じた者が多かったが、パリサイ人をはばかって、告白はしなかった。会堂から追い出されるのを恐れていたのである。彼らは神のほまれよりも、人のほまれを好んだからである。」(ヨハネ12：42，43)

彼らは性格の弱さゆえに迷っている。霊は熱していても肉体は弱いからである。(マタイ26：41参照)それらの彷徨者は挫折と不満の荒野にいる。彼らは律法を知っていても、自分の欲望と熱情を満足させるはかない喜びの誘惑に屈してしまうのである。

そして、多くの犠牲を伴う偽善の荒野もある。言うことと行なうことの違う偽善者は彼自身まっすぐな狭い道からそれており、大勢の若者や罪のない人が、そのような世にはびこる不正直と不信を見て人間に対する信頼を失い、行くあてを見失っているのである。

救い主が律法学者とパリサイ人を偽善者として非難されたマタイ伝23章を、私たちは時々読み返さなければならない。13節にはこう書かれている。

「偽善な律法学者、パリサイ人たちよ。あなたがたは、わざわいである。あなたがたは、天国を閉ざして人々をはいらせない。自分もはいらないし、はいろうとする人をはいらせもしない。」

また、家や社会の指導者の良くない見本を見て、荒野にさまよい出る人も多い。最も頻繁に見られるのが、この悪い見本である。ポルノグラフィー、婚前交渉、不貞、同性愛などは現代の世の中で容認され、私たちはまさにソドムとゴモラの二の舞を演じつつある。世の中はあまりに腐敗している。私たちには、人格を備えた強力な指導者が各地に必要である。清廉、高潔で信頼に足る模範的な指導者が。

啓示によって与えられた知恵の言葉に違反すれば、多くの者は禁断の悲しむべき道に迷い出てしまう。罪は罪を呼び、さらにスリルと興奮を求めて、ついには破滅に至る。私たちは皆、アルコールやタバコや幻覚剤の悪影響を承知しているというのに、なぜ多くの人が道を踏みはずすのだろうか。

若者がイエス・キリストの福音の原則から迷い出るのは、家庭内での両親のふさわしからぬ見本が大きな原因である。家の中でアルコールやタバコを用いれば子供にも同じことを許すようなもので、子供はその他の幻覚剤にも没頭しようとし、その結果、家を離れて、背中にリュックを背負ったヒッチハイカーのように目的もあてもなく、真理と正義のまっすぐな狭い道をそれて、さまようことが多いのである。彼らはもはや自由ではない。自由を求めると言いながら実は悪癖の奴隷で、荒野から抜け出て切に必要としている光と愛に立ち返ることは、彼らにとってはもはや至難のことである。

不道徳は世にはびこっているが、主はそれを非難された。不道徳は荒野に迷い出る一番確実な道である。主は言っておられる。「あなたは姦淫してはならない。」(出エジプト20：14)このような罪を犯す者のみならず、犠牲者や他の大勢の人までもその影響を被り、悲嘆と憂いの重い荷を負うことになるのである。

先日私は新聞でひとつの記事を読んだ。そこには、長い間心痛を負いながら、さまよう息子を気づかい、待ちわび、息子のために祈ったであろう母親の憂いと苦悩がにじみ出ていた。

「凶器を所持した婦女暴行容疑の16歳の少年が警官に射殺されたが、警察当局の語るところによると、その少年の母親は当局に謝意を表したとのことである。

少年は木曜日、38口径のピストルを警官に向けて発射しようとしたため……射殺された。

母親は……そのあと『息子をつかまえて下さってありがとうございます。もう息子のことで苦しまなくてすみます』と語った。」(「デゼレトニュース」1974年7月26日)

たしかに、死よりも悪いことはある。自己満足とごう慢のとりこになって、ひとりさまよっている人々もいる。彼らは自分と神との関係も、自分が神に頼っていることも悟らないでいる。聖典は私たちにこう忠告しているのである。

「心をつくして主に信頼せよ、自分の知識にたよってはならない。

すべての道で主を認めよ、そうすれば、主はあなたの道をまっすぐにされる。」(箴言3：5，6)

迷う者の中でおそらく一番多いのは、自己を統御するということに対して、決心もできず、希望も持てない者であろう。彼らの荒野は暗くて実にわびしい。彼らは己れの主人となるまでに、幾度も幾度もつまずいては倒れる。

ダビンチがあるときこのように言った。「あなたは、あなた以上に偉大な人間を支配することはないし、あなたよりもつまらない人間を支配することもない。人の成功の高さは克己によって、人の失敗の深さは放逸によって測られる。……この律法は永遠の正義の表われである。」

ソロモンの言葉を引用すると、「自分の心を治める者は城を攻め取る者にまさる。」(箴言16：32)

キリストはこのことを、次のような言葉で教えられた。これはおそらく、さまよわずにいるための最良の解答であろう。

「狭い門からはいれ。滅びにいたる門は大きく、その道は広い。そして、そこからはいって行く者が多い。命にいたる門は狭く、その道は細い。そして、それを見いだす者が少ない。」

この言葉は真実である。まっすぐな細い道を歩み、わき道が非常に危険なことを承知している者は、人生に成功を収め、進歩と達成を得る人々である。道をはずれて遠回りをする者は、失敗と破滅への道の途上にあることを知るであろう。

最近耳にした話を、ふたつ御紹介したい。ひとりは富も地位もある家庭を家出した青年の話である。彼は聡明で

学業成績も良く、工学技術にたけていて、将来の職業も生活も保証されていた。ところがいつしか、彼は現代の急進的無神論思想の持ち主の例にもれず、「自分の好きなことを好きなままに行なう」友だちを選んでいた。

前途の危険を忠告されても、彼は禁じられた道を歩み続け、アルコールや麻薬を経験し、派手な生活をした。それがついには家出をし、国中を放浪しながら、宿無し族ともいうべき放浪者たちの仲間に加わったのである。だれに対しても責任がなく、行くも来るも思いのままで、何の義務も持たず、見たところ望むとおりののんきな生活をしているようであった。

しかし、まっすぐな細い道からそれた人の話は、必ずと言ってよいほど悲しい結末になる。先ほどの青年の人生も悲劇に終わった。彼は麻薬とアルコールを飲んで霧の夜ふけに仲間とオートバイを飛ばし、橋の欄干に激突して死んだのである。友だちと遊び半分の協定でも結んでいたのであろう。彼らは青年の親にも知らせず火葬にし、事故の場所にその灰をまき散らしたという。

遺体をきちんと埋葬したいと願うことさえかなわなかった両親や愛する人々の嘆きを、想像してみていただきたい。自ら選んで放浪し、さだかでないものを求めて人生を空費する若者、その若者があとに残した大勢の親兄弟の、毎日の悲痛を考えてもみていただきたい。

先日の晩に見たテレビ映画では、父親が娘に、身を滅ぼす悪の道に誘う仲間から離れ、家に戻ってきてほしいと哀願していた。その娘が「私には自分で人生を選ぶ権利がある」と言うと、父親はそれに答えて「おまえは自分だけでなく家族のみんなも苦しめているんだよ」と言った。

キリストは私たちを罪から救おうとひとたび苦しんで死なれたが、もしも私たちが、この世でも来たるべき世でも私たちのためになるキリストの教えと計画を拒んだ時には、再び苦しまれるに違いない。なぜならキリストは、私たちを深く愛しておられるからである。破滅に導くサタンの道ではなくキリストの道を選びさえすれば、主が無限の富を約束されることを、私たちはなぜ悟らないのであろうか。

もうひとつお話したいのは、今の話と似たような状況の別の放蕩息子の例である。彼も仲間に誘われ、彼らの言葉で「お定まり」と呼ぶ束縛から自由になろうと、家出をした。そしてやはり例にもれず、アルコールやタバコや麻薬を経験し、不道徳に走った。

しかし違うのはその結末である。彼の胸の奥深くにあった何かが、家族との接触を保たせていた。何かが少年時代に受けた教えを思い起こさせ、家族と会ったときに、やむにやまれぬ家族の心情と愛をぶつけられて、彼はついに不承不承家族の集まりに出ることを承知した。家に立ち寄ったあるときに、その集まりが持たれたのである。ひげは伸び放題、長髪はもじゃもじゃの風体で、彼はその席に出た。

家族は賛成できないまでも、彼を歓迎し、愛を示した。青年は家族の深い愛情を感じて、それが仲間の表面的な友情にまさっていることを知った。そしてその後家族と共に教会へ行き、そこで自分に関心を示してくれるやさしい少女に会った。彼はまもなく風呂に入ってひげを剃り、身なりを整えて普通通りの生活をするようになった。

禁断の道へ迷い込むことから人を守るのは、親に対する尊敬と、神に従った秩序ある社会の標準を守ることである。概して、私たちは見たり話したりする通りに行動するものである。清潔な品位ある団体に属したいならば、私たちはその団体のきまりや標準を受け入れなければならない。

神の律法に従えば祝福と幸福がもたらされる一方、真理と正義の道からさまよい出るすべての者には、どのみち罰と悔恨がやってくる。それは実に単純明快、人は自分のまいたものを、刈り取るのである。（ガラテヤ6：7参照）

私たちは子供や愛する人たちが禁断の道に迷い込むのを手をこまぬいて見ているのではなく、その前に、禁断の道に魅力を感じず、また誘われないように、逆から言えば義の道がその人を誘い導くように、できる限りのことをしなければならない。それはいかに大切なことか。私たちはそれを、愛と言葉と模範によって行なうのである。

戒めを知って、理解し、守り、イエス・キリストの福音の教えを学んで、それに従うならば、私たちは悲しい孤独な荒野にさまようことなく、まっすぐな狭い道を歩み続けるであろう。私たちには無上の約束が与えられている。

「およそこれらの言葉を憶えて守り且つ行い、この誡命に従って歩むすべての聖徒らは、そのへそに健康を受けその骨に髄を受けん。また智恵と知識の大いなる宝まことに秘れたる宝を見出さん。而して走れども疲れず、歩けども気を失うことなからん。主なるわれ彼らに一つの約束を与う。すなわち、さつりくの天使はイスラエルの小児たちが如く、彼らを過ぎ越して屠ることなかるべし。」（教義と聖約89：18－21）

荒野から抜けいで、道がまっすぐに永遠の生命へと続く花咲く太陽の園へ行こうと模索しているさまよう人よ、心から申し上げる、光と知識の源により頼みなさい。神と御子イエス・キリストを振り仰ぎ、御二方について学び、その戒めに従いなさい。御二方は生きておられる。そのみ言葉は真実で、幸福と永遠の生命への道は御二方による以外にないと、証申し上げる。

また私は厳粛に証したい。イエス・キリストは現在完き福音を持ち、神の予言者を頭に備えたキリストの教会を再びこの地上に立てられた。この教会により、私たちは荒野から光へと確実に導かれるのである。私たちは地のあらゆる人々に、研究をし、共ども永遠の生命をもたらすキリストの教会に加わるようにお勧めする。これらのことをへりくだり、イエス・キリストのみ名により祈る次第である。アーメン。

# 人はいかにして救われるか

1974年10月5日，半期総大会土曜日午前の部

第二副管長
マリオン・G・ロムニー

愛する兄弟姉妹ならびに友人の皆さん。私がこの話をするにあたって主のみたまを受けられるように、そしてまた皆さんが主のみたまをいただいて私の言葉を聞くことができるように、共に祈っていただきたい。私はこれから、イエス・キリストの福音のごく基本的ではあるが、非常に大切な事柄を幾つかお話したい。また、私たちがみたまを受けて理解を増すことができるように、多くの聖句を使って話を進めるつもりである。

末日聖徒イエス・キリスト教会は、信仰箇条第3条でこのように宣言している。すなわち、

「われらは、キリストの贖罪によりすべての人類は、福音のおきてと儀式とを守ることによりて救われ得ると信ず」と。

私はイエス・キリストの教会がこの箇条に対して抱いている見解について、ここでお話したい。

ここで用いられている救われるとは復活すること、ならびに清められ、日の光栄を受け、不死不滅の状態となって神と交わり、永遠の進歩の過程を限りなく歩み続けるために、神のみ前に戻ることを意味する。

これがどのような意味か少しでも知るためには、まず神と人の姿ならびに属性を知り、互いの関係を知っておくことが必要である。

人は霊の結合体、すなわち二元性を具えた存在、つまり触知し得る骨肉の体をまとった霊である。一方神は、永遠の生命を享受しておられる、救いの状態に入った完全なお方である。神は不死不滅の状態と、最高の光栄に高められた状態の両方を具えておられる。人が福音の律法と儀式に従えば受けることのできる、かの恵まれた状態を神はすでに享受しておられるのである。

現在、永遠の光栄のうちにいるのは、全能なる神のみではない。数限りない救われた人々も神との交わりを享受しているのである。そこでは家族関係が存在する。霊の子孫が生まれる。人の霊はそこにおいて生まれるのである。現代の啓示は、諸々の世界に住むすべての者は「神より生れたる息子と娘」（教義と聖約76：24）であることを断言している。私たちの天父なる神は、実際に私たちの霊の父である。パウロがアレオパゴスの評議所で語ったかの偉大な説教の中で宣言したように、私たちは「神の子孫」（使徒17：29）なのである。

父なる神は不死不滅のお方である。しかし人はまだ不死不滅の状態にはなく、死に従う体を持つ存在である。人の体は土から造られ、死ぬともとの土に戻る。だが人の霊はどうなるのだろうか。多くの人々がこの最も大切な疑問を心に深く思い巡らしてきた。シェイクスピアもこの点を取り上げ、「生きる、死ぬ、それが問題だ」という有名な言葉を吐いたハムレットの口を借りて、このことを語っている。

生きる、死ぬ、それが問題だ……
死ぬ――眠る――
……しかも眠ってしまえば、みんなおしまいではないか、
おれたちの心の悩みも、この肉体につきまとう数知れぬ苦しみも。だとすれば、それこそ願ってもない人生の終局ではないか、死ぬ――眠る――眠る！　夢を見るかもしれない、そうか、ここでつかえるのだな。
この世のありとあらゆる煩いから脱れて、
眠って、さてとその先どんな夢を見るか、
それだ、
それを思うと心が鈍らずにはおられぬのだ――この躊躇がこの悲惨な人生をいつまでも永びかすのだ。
でなくて、誰がおめおめ我慢するものか、この世の鞭や嘲り

暴君の無法な振舞い、いばりくさった奴らの侮蔑
辱められた恋の痛み、裁判ののろくささ、
役人どもの空いばり、つまらぬ奴らを相手に
立派な人がじっと堪え忍ばねばならぬ数知れぬ屈辱
誰がこんな重荷を忍ぶものか、短剣のただのひと突きで、
この世から脱れ出ることができるのに？
生活の苦しみに打ちひしがれ、汗にまみれて呻きながらも
ただ死後のある不安、いったんその境を越えて行った旅人が
まだ誰一人戻って来たためしのない、あの未知の国への不安があればこそ、
おれたちの決心もにぶるのだ。
この世を去って知らぬ禍いを求めるよりは、
とどまって現在の苦しみを堪え忍ばせるのだ。

「ハムレット」第3幕、第1場

シェイクスピアはこのせりふの中でドラマチックに、人の霊は人の死後どうなるのかという疑問を投げかけている。けれどもその答えは告げていない。彼は主がこの疑問に直接答えておられたことを知らなかったのである。

紀元前75年頃、アメリカ大陸にアルマという名の神の予言者が住んでいた。彼は死後人間はどうなるかについてしきりに知りたいと願った。そして強い信仰を持って主に祈り求めたので、主は天使を遣わしてアルマにその答えを示された。アルマはこれを次のように記録している。「あらゆる人の霊は……この死ななくてはならぬ肉体を離れるとその霊に生命を与えたもうた神が備えたもうところへ帰るのである。……

その時義しい人の霊はパラダイスととなえる幸福な有様、すなわち安息と平和な有様に入り一切のわずらいと悲しみとを離れて息む。

次に悪人の霊は……そとの暗やみの有様に追い出され、泣き悲しんで歯がみをするのである。……

これがすなわち悪人の霊の有様で、かれらは暗やみの中で大そう恐れおののきながら自分たちに下る火のような神の怒りを待っている。かれらは復活の時までこのような境涯に止まらなくてはならない。しかしこれと同時に義人はパラダイスに在る。」（アルマ40：11－14）

教会はこの聖句を事実として受け入れている。

アルマのこの言葉は、文字通り万人の復活があることを告げている。そして同様のことを、パウロもコリント人に宛てて書き送っている。

「アダムにあってすべての人が死んでいるのと同じように、キリストにあってすべての人が生かされるのである。」（Ⅰコリント15：22）

教会は、イエス・キリストが死に打ち勝ったことによって、ご自身のためばかりでなく全人類のためにも墓を開かれたという、聖典の告げる教えを信じている。

教会はまた、復活後人はみなそれぞれ不死不滅の状態で、神の裁きの座に引き出され、この試しの世においてなした行ないに応じて最後の裁きを受けるという、聖典の告げる教えをも信じている。その裁きの座での宣告は、福音の律法と儀式に対する従順、不従順によって定まるのである。この世においてこれらの律法と儀式に従った者は、イエス・キリストの贖いの血によって罪の汚れから清められ、神の日の光栄の王国に救われて、神と共に永遠に住まうことになる。しかし、福音の律法と儀式に従わない者は、その受ける報いは小さいであろう。

アルマはこの最後の裁きについて、次のように語っている。

「この回復の時が来ると義人は神の王国で栄光を得て輝きを放つ。

しかし、これに反して悪人には恐ろしい死滅が来る。……苦い杯のかすを飲むのである。」（アルマ40：25,26）

紀元前550年頃にも、当時のアメリカ大陸のある予言者が、「キリストの贖罪により、すべての人類は、福音のおきてと儀式とを守ることにより」どのようにして救われるかについて述べている。従って横柄とは思うが、私のこの話を結ぶにあたって、その予言者の記録から少し長くなるが言葉を引用したい。これを読むのに6分間ほどかかるが、時間をかける価値は充分にあると思う。

「私はあなたたちの多くが未来の事を知ろうと思って、大いに捜し求めたことを知っている。それ故にあなたたちはわれわれの肉体は必ずやせ衰えて死ぬものであるけれども、未来に於てわれわれは復活体となって神に会うと言うことを知っていると私は明らかに認めている。

また真に、私たちが出てきたエルサレムに於て神が肉体のまま世の人々に現われたもうと言うことをあなたたちが知っていると明らかに認めている。〔先程述べたように、彼がこのことを語っているのは、紀元前600年に近い頃のことである。〕その事が世の人々の間に起るのは真実大切である。それは大いなる造り主が万人を自分に服従させるためにはまず自らこの世の人に服従し万人のために死にたもう必要があるからである。

万人に死が伝わったから大いなる造り主の憐み深い道が成就するためには必ず復活を来す能力がなくてはならない。そしてこの復活は人間の始祖が堕落をしたから必ず人間にこなくてはならな

い。そして人間の始祖が堕落をしたのは律法を破ったから生じたのである。かように人間は堕落をしたために、主の御前から追い出されてしまった。

それでその罪の贖いは、キリストの限りない贖罪でなければならない。すなわちそれがキリストの限りない贖罪でなかったならば、この朽ちる肉体が朽ちないものになることができないから、人間に下った最初の裁きが限りなく続かなくてはならない。もしそうであるならば、この肉体は墓に横たえられて朽ち果てもとの土に帰って再びよみがえることはない。

おお大いなる神の知恵よ。その深い憐みと御恵みよ。ごらん、もし肉体がもうよみがえらないならば、私たちの霊は必ずあの天使、すなわち永遠の神の御前から堕ちて悪魔となった天使に服従してもうよみがえることは決してない。

そして私たちの霊は必ずあの天使のようになり、私たちは悪魔すなわち悪魔に属する使たちとなって私たちの神の御前から締め出され、あの偽りを生む親と共に、彼自身のように不幸の中に留らなければならない。……

しかしイスラエルの聖者である私たちの神が救いの道を立てたもうたから……肉体の死である墓は一時的のものであって、やがてその中にある死体を解き放つ。

また……霊の死である地獄もやがてその中にある死んだ霊を解き放つ。〔神の御前から締め出されることは全くの地獄である。〕それであるから、墓と地獄とは何れもその中にある死者を出さなければならない。すなわち地獄はその捕えた霊を放ち、墓はその捕えた肉体を放たなければならない。そこで人の体と霊とはもとの通り一しょになるのであるが、これは全くイスラエルの聖者のもちたもう復活の能力による。

おお私たちの神の計画の偉大なことよ。……その霊と体とはまたもとの通り一しょになる。ここですべての人間は不朽で不死不滅の者となり、しかもかれらは生ける人であってこの世で肉体を持っている私たちのように物事を知る力を具え、今の私たちが持っている物事を知る力はその時に完全になるのである。

それで私たちは、自分に罪があること、汚れていること、裸であることをすべて完全に覚るのである。しかし義人たちは自分の喜びと義しさとを覚りつくして、清浄の衣すなわち義の衣を着せられる。

さて、すべての人々がこの第一の死から復活するとかれらはすでに不死不滅となっているから、イスラエルの聖者の審判の座に出なければならない。それから裁判があって、すべての人々は神の神聖な裁判の法によって裁かれなければならない。

そして義しい者たちはやはり義に止まり、汚れた者たちはやはり汚れに止まる。……かれらの苦しみは、果しなくいつまでもいつまでも炎が昇る燃える硫黄の湖の如くである。この事の確であるのは、主の生きていますように確である。……

しかしごらん、イスラエルの聖者を信じ、この世の苦難を堪え忍び、世の辱しめを物ともしないイスラエルの聖者の聖徒である義人たちは、この世の始めからかれらのために用意された神の王国を受け嗣いで、その喜びはとこしえに充ち満ちる。

おお私たちの神イスラエルの聖者の憐みの大きなことよ。神はその聖徒らをあの恐ろしい怪物である悪魔と死と地獄と永遠の苦しみである燃える硫黄の湖から救いたもう。

おお私たちの神の偉大な神聖さよ。……。

誰でもみな神の声に聞き従うならば、神はあらゆる人を救うためにこの世に降りたもう。見よ、神はおよそアダムの家族である者は男でも女でも子供でも、差別なくあらゆる命のある者の苦痛を受けたもう。

神がこのように苦痛を受けたもうのは、一切の人類をあまねく復活させて、あの大裁判の日にすべての人を神の御前に立たせんがためである。

神はすべての人に向って、汝らはイスラエルの聖者を全く信仰して悔い改め、神の御名によってバプテスマを受けよ。さもなければ神の王国には救われないと仰せになる。」（IIニーファイ9：4－9，11－16，18－23）

しかし、「悔い改めて神の御名を信じ、その御名によってバプテスマを受け」、終りまで忍ぶ者は救われるであろう。（IIニーファイ9：24）

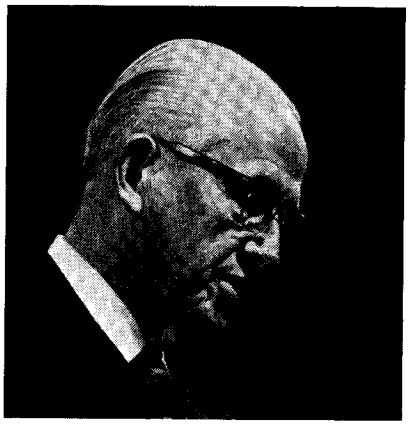
愛する兄弟姉妹ならびに友人の皆さん。このように主が命じられた方法によれば、すべての人は福音の律法と儀式に従うことができ、キリストの贖いによって救われるのである。

私自身の証を申し上げたい。これらの教えは真実である。末日聖徒イエス・キリスト教会はキリストが建てられた教会である。主はこの教会に権能を与えておられる。そして、救いをもたらす福音の原則と儀式について全人類に教え、それを施すよう、主より権限を託されていることを証する。

私たちの告げる言葉によく耳を傾け、祈りの気持をもって考えるよう、心からへりくだり、愛を込めて申し上げる。もしそのようになさるなら、あなた方は同様の証を受け、救いへの道を歩み神の王国に救われることであろう。私たちはすべてがそのような状態に至ることができるように、主なるイエス・キリストのみ名により、へりくだってお祈り申し上げる。アーメン。

# 落胆してはいけない

1974年10月 5日(土)、半期総大会午前の部



十二使徒評議員会会長
エズラ・タフト・ベンソン

この話の責任を与えられ、心からへりくだり、感謝している。私がこれから話すことが、将来困難に直面したときに、物心両面にわたって何らかの役に立つことを希望して止まない。

主が予告されているように、現在人々が物心両面において怖れおののいている時代に私たちは生きている。（教義と聖約45：26参照）そして多くの人がこの人生の戦いに疲れ、落胆している。最近の大学生の主な死因は自殺であると言われている。また試練と苦難の伴う善悪の最後の対決の時が近づくにつれて、現在サタンは失望と落胆、意気消沈、憂うつをもって聖徒を打ち負かそうとますますその力を増している。

しかし、私たち末日聖徒は、すべての民の中で最も楽天的であり、悲観的な気持は少しもない。なぜなら「地より平和の取り去られ、悪魔自らの領土を支配する時」であっても、「主もまたその聖徒らを支配し、その真中にありてこれを」統治されることをよく知っているからである。（教義と聖約1：35, 36）

将来の困難な時代にあっても、教会はそれを導かれる神のみ手のもとに存続することは確かである。そうであれば教会とその教えに忠実であることは私たちひとりびとりの責任ではないだろうか。「最後まで固く立ちて、打ち勝たれざるものは救わるべし」（ジョセフ・スミス1：11）私たちがこの失望と落胆と絶望を与える悪魔の計画に打ち負かされることがないように、主は多くの方法を用意しておられる。そしてこの方法に従えば、私たちの霊性は高められ、喜びへ通じる道に歩み出せることだろう。

O その第1は悔い改めである。私たちはモルモン経の中に、「絶望は悪い行いから来る」（モロナイ10：22）という言葉を見い出す。またアブラハム・リンカーン大統領は次のように言っている。「善いことをしたときは気持もよいが悪いことをしたときには気持も悪い。」罪悪は人を絶望と落胆の淵へ引きずり込む。そして罪悪を犯して一時的な快楽を得たとしても、結局は不幸に終わってしまうのである。「罪悪は決して幸福を生じたことはない。」（アルマ41：10）罪悪は神の業と調和することなく、むしろ霊を抑圧するものである。従って、人はいつも神のすべての律法と調和しているかどうか自らをよく吟味する必要がある。私たちが守るあらゆる律法は、それ相応の祝福をもたらす。しかし守らなければ、必ずそれ相応の挫折を招く結果となる。絶望の重荷を負っている者は、主のもとにくるとよい。なぜなら、主のくびきは負いやすく、その荷は軽いからである。（マタイ11：28－30参照）

O 第2は祈りである。必要なときの祈りは大きな恵みをもたらす。容易に耐え得る。試練においても、ひどい苦しみを伴う試練でも、私たちは祈りを捧げることによって神に近づき、大きな慰めと助けを得ることができる。「勝利者たらんことを常に祈るべし。」（教義と聖約10：5）私たちはいつも祈りを

欠かしてはならない。少年ジョセフ・スミスは聖なる森において悪魔が自分を破滅させようとしたときにどのように祈りを捧げたかについて、次のように記している。「何とぞ逃れしめたまえと、全力を振りしぼって神を呼び求めた。」（ジョセフ・スミス2：16）これもまた、私たちが絶望に陥って破滅することのないようにするひとつの鍵である。自分を忘れて人々のための義しい務めに精を出すなら、あなたの見識は高まり、個人的な問題もなくなる。また少なくとも、物事を正しく見る力が得られるであろう。ロレンゾ・スノー大管長は次のように言っている。「もし少しふさぎ込むようなことがあるなら、周囲を見回し、もっと苦しい状態にある人を捜しなさい。それからその人の所に行って、その苦しみが何かを知り、主があなたに授けて下さった知恵をもってそれを取り除くように努めなさい。そうするとあなたのふさいだ気持は晴れ、楽になるだろう。そして主のみたまはあなたの上にあり、すべての事柄が明らかとなるであろう。」（Conference Report「大会報告」、1899年4月6日、P.2，3）

自分の問題を解決することにのみ追われている女性よりも、子供を正しく育てようと努めている女性の方が、もっと霊的に成長しやすい。

第4は仕事である。地球はアダムの故にのろわれたが、働くことは神からの祝福であって、悲しむべき事柄ではない。神にもなすべき仕事がある。従って私たちも働くべきである。退職した人の多くは活気を失い、早く死ぬようである。怠惰の地獄で暮らすことは、砂でロープを作るよりも難しいという言葉があるが、私たちはよく働き、自分自身と責任ある人々のために霊的、精神的、社会的、また物質的な必要を満たすようにすべきである。イエス・キリスト教会には、神の王国を前進させるためになすべき仕事がたくさんある。伝道、家族の系図、神殿の仕事、家庭の夕べ、そしてその他の教会の責任を受け、全力を尽くして遂行することは、私たちがなすように求められている仕事のほんの一部分にすぎない。

第5は健康である。肉体の状態は霊にも影響を及ぼす。これこそ主が知恵の言葉を与えられた理由である。私たちは早寝早起きを励行し（教義と聖約88：124参照）、自分の力以上に急がず（教義と聖約10：4参照）すべてに節度を保って行動すべきである。一般に自然の状態のままの食物を多く食べ、添加物を加えずに精製もできるだけしないようにすれば、その食物は私たちの健康にとってもっとよいものとなる。食物は心にも影響する。そして体を構成するある要素が欠けると、心がふさいでくる。定期的に健康診断を受けることは予防に役立ち、病気を見つけ出して治療する上でも役立つ。休息と運動は健康には欠かせない。また新鮮な外気の中での散歩は霊を活気づけるものである。健全なレクリエーションは私たちの宗教活動の一部である。つまり生活に変化をもたらすことが必要なのである。ただそのように考えるだけでも霊を鼓舞することができる。

第6は読書である。これまで多くの人々が試練に直面したときにモルモン経を開き、力と励みと慰めを得てきた。また旧約聖書の詩篇も、苦しみに陥った人の心に対する特別な糧となっている。今日私たちには、近代の啓示である教義と聖約という書物が与えられている。予言者の言葉、特に教会の現在の大管長の言葉はぜひ読む必要がある。これは悩んでいる人に導きと慰めを与えるものである。

第7は祝福である。人は特に急迫したとき、重大な危機に直面したとき、神権者の手から祝福を受け、慰めと導きを得た。同様に父親も自分の妻と子供たちに祝福を与えることができる。祝福師の祝福を受け、その言葉を絶えず祈りの気持をもって思い巡らすならば、それは物事を特に危急の時に洞察する力を得るのに役立つのである。聖餐はそれにあずかるすべての人々に祝福をもたらす。

従ってしばしば聖餐を受ける必要がある。病床に臥している人々もそうすべきである。

第8は断食である。ある類の悪霊は

祈りと断食とによらなければ、追いだすことはできないと聖典に記されている。私たちは定期的に断食することによって、心を清め、肉体と霊を強めることができる。通常の断食、すなわち断食日曜日に行なうよう告げられている断食は、食物も飲み物も口にすることなく、24時間行なうものである。必要な場合、ただ飲み物を取るだけで、それ以上長く断食する人もいる。断食に際しては知恵を使うべきである。そして断食を終えるときには、胃の負担にならない程度の食物をもって終わるとよい。断食を実りあるものとするために、祈りと黙想をそれに加えるべきである。また、体を使うことは最小限にとどめるべきである。聖典の言葉や断食を行なう理由についてよく思い巡らすことができれば、そのこと自体祝福である。

第9は友人である。あなたの言葉を聞き、喜びを分ち合い、あなたの重荷を負い、あなたに正しく助言を与える真の友の友情は、決してお金で買えないものである。予言者ジョセフ・スミスの次の言葉は絶望の獄に捕われている人にとって特別な意味のある言葉である。「友からの便りがどれほど懐しいものか知るすべもないだろう。たとえどこから来た手紙であろうと、ひとたび友情の絆が示されると、私たちの心はその友とひとつになるのだ。」（Teaching of the Prophet Joseph Smith 「予言者ジョセフ・スミスの教え」P. 134）

あなたの家族が最も親密な友人であることが理想的である。そして最も大切なことは、天の御父ならびに私たちの兄であるイエス・キリストと友になるように願うことである。あなたを徳に導く人と友になれることは何という祝福であろうか。友を得るためには、親しみを持たなければならない。友情はまず家庭から始まり、次いでホーム・ティーチャー、定員会指導者、監督、その他教会の教師や指導者へと広がるものである。また、聖徒たちとしばしば会合し、交わりを持つことによって、気持を鼓舞することができるのである。

第10は音楽である。霊感に満ちた音楽は、崇高な思いを心に満たし、正しい行ないへ人を駆り立て、心に平安を告げる。サウルが悪霊に悩まされていたとき、ダビデはサウルのために琴を弾いた。するとサウルの気持は静まり、悪霊は彼を離れた。（サムエル上16：23参照）ボイド・K・パッカー長老は、シオンについての霊感あふれる歌をいくつか憶えるように勧めている。そうすれば、心が誘惑に苦しめられるときに、大声で讃美歌を歌い、霊感に満ちた言葉を思い出し、悪い思いを払い去ることができるからである。またこうすれば、弱々しい沈んだ思いをも払い去ることができる。

第11番目は忍耐である。かつてジョージ・A・スミスが病気を患っていたとき、彼のいとこの予言者ジョセフ・スミスが見舞いに来た。ジョージ・A・スミスは当時の模様を次のように述べている。「彼（予言者ジョセフ・スミス）は、どんな困難が私の身の回りに起ころうとも、決して落胆してはならない。ただ忍耐して信仰を働かせ、勇気を持ちなさい、そして山の頂に立つようにすべきである、と私に言った。」（George A. Smith Family 「ジョージ・A・スミスの家族」、ゾラ・S・ジャービス編、P. 54）

悪魔の陰うつな霊があなたを離れるまで、ただ正直に悪魔の働きかけに耐え続けなければならない時があるであろう。主は予言者ジョセフ・スミスに次のように言われた。「汝の不幸、汝の困苦はただこれ束の間なり。

而して、もし汝よくこれを耐え忍ばば、神は汝を高きに挙げたまわん。」（教義と聖約121：7，8）

たとえ絶望の真っただ中にいても、敬虔な努力を払うことによって、ついには私たちは輝く光のもとに立ち返ることができるのである。私たちの主なる救い主イエスでさえも、十字架にかけられていた間、一時御父からひとり取り残されて無上の試みに直面されたのである。そして人の子らのためにその業を続けられた。それから間もなく、救い主は栄光を得、完き喜びを受けられたのである。あなたが試練に出会うときには、かつて得た勝利を思い起こし、忠実であれば続いて与えられる恵

みを数えることができる。この試練に伴い、さらに大きな祝福が与えられるという確固たる希望がもてるのである。また、時至れば神がすべての者の涙を拭い去ること、そして「目がまだ見ず、耳がまだ聞かず、人の心に思い浮びもしなかったことを、神は御自分を愛する者たちのために備えられた」（Ⅰコリント2：9）ことを確かに知ることができる。

12番目は目標である。物事を判断する能力のあるすべての神の子は、目標すなわち、短期目標と長期目標を定める必要がある。適切な目標を達成しようと邁進している人は、落胆の気持などすぐに打ち砕いてしまう。そして、ひとつの目標を達成すると、すぐ新しい目標を定める。こうしていつも目標を持ち続ける。毎週聖餐を受けるたびに、私たちはイエス・キリストのみ名を受け、御子を常に忘れず、また主の戒めを守るという目標に対して決意を新たにするのである。また聖典には、イエス・キリストがみ業の準備をするにあたって、「ますます知恵が加わり、背たけも伸び、そして神と人から愛された」（ルカ2：52）と書かれている。これには霊的、知的、肉体的、社会的な4つの面が関係している。また、「汝らはいかなる人物にてあるべきか。まことに汝らはわれと同じ人物ならざるべからず」（Ⅲニーファイ27：27）と主は言っておられる。私たちは主の足跡を踏み、主と同じようにすべての美徳を具え、主の面を求め、私たちの召しと選びを確かなものにするために業に励むという生涯の目標を持っている。

使徒パウロは次のように述べている。「兄弟たちよ……ただこの一事を努めている。すなわち、後のものを忘れ、前のものに向かってからだを伸ばしつつ、目標を目ざして走り、キリスト・イエスにおいて上に召して下さる神の賞与を得ようと努めているのである。」（ピリピ3：13，14）

主のようになろうという目標を心に抱きなさい。そうすれば、主を知り、主のみこころを行ないたいと心から求めることによって、沈んだ気持を払い去ることができる。使徒パウロは「キリスト・イエスにあっていだいているのと同じ思いを、あなたがたの間でも互に生かしなさい」（ピリピ2：5）と言い、またキリストも「何を念うとも、念々われを見るべし」（教義と聖約6：36）と言っておられる。もし私たちがこのようにすれば、どうなるのであろうか。「あなたは全き平安をもって、こころざしの堅固なものを守られる。」（イザヤ26：3）

予言者ジョセフ・スミスは次のように言っている。「救いとは、自分のすべての敵に打ち勝ち、それらを足下に踏みつける以外の何ものでもない。」（「予言者ジョセフ・スミスの教え」P.297）神が義にかなった方法を与えておられることを心に留めるなら、私たちはこの失望、落胆、絶望を伴う敵に打ち勝つことができる。そして、ここで私が述べたのはそのための方法である。「あなたがたの会った試練で、世の常でないものはない。神は真実である。あなたがたを耐えられないような試練に会わせることはないばかりか、試練と同時に、それに耐えられるように、のがれる道も備えて下さるのである。」（Ⅰコリント10：13）

まことに、人生は試練である。人生は試みの世である。いにしえの聖なる人々が、自分のことを「この世をさすらう旅人にして巡礼」（教義と聖約45：13）であると考えたように、私たちも天の家を離れていることでそのような気持を抱くときがある。

あなた方は、ジョン・バンヤン*の「天路歴程」という本を知っているであろう。クリスチャンという名の主人公が、苦難の末、天の都へ迎えられたという話である。彼はそれを自分の目標とした。しかしこの目標を達成するためには、多くの障害を克服しなければならなかった。その中のひとつが「落胆の沼」からの脱出である。霊性を高め、喜びへ通じる道に踏み出すために、私たちは失望と落胆と絶望という悪魔の計画に打ち勝たなければならない。そのためには、私が今述べてきた12の方法がある。すなわち、悔改め、祈り、奉仕、仕事、健康、読書、祝福、断食、友人、音楽、忍耐、それに目標である。

将来の困難な時代にこれらをすべて使って、巡礼者クリスチャンのように大きな幸福をこの世で得、そして日の光栄の最高の王国において完き喜びを受けることができるように祈るしだいである。イエス・キリストのみ名により申し上げる。アーメン。

*ジョン・バンヤン（1628－88）イギリスの宗教著作家。作品に「天路歴程」「聖戦」などがある。

# 新聞　雑誌　図書に見る
# モルモンについての記事

日頃、なにげなく読んでいる新聞、雑誌、図書の中に、時々、モルモンについて触れた記事を見かけることがある。読者の方々から寄せられたそれらのいくつかを紹介してみたい。

**☆禁酒・勤勉のお国柄ユタ州　6割がモルモン教徒**

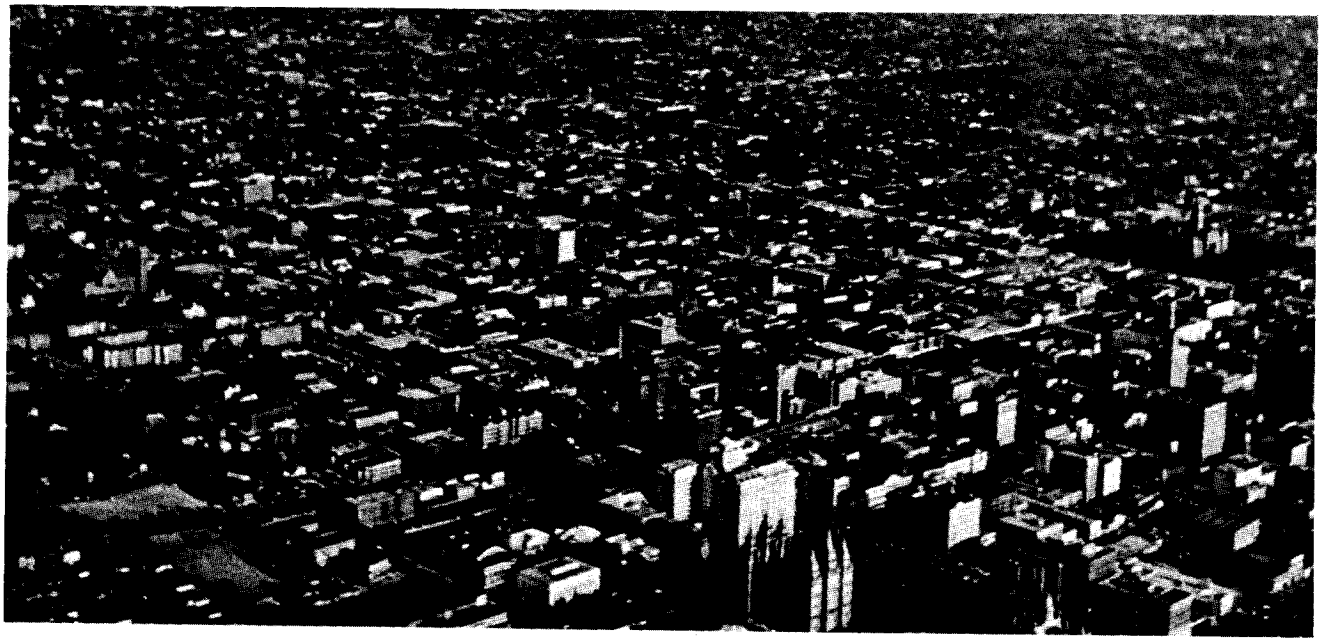
数年前、朝日新聞「変りゆくアメリカ」シリーズ15で、白井特派員はソルトレーク、シティーの訪問記を紹介している。

「レストランで食事をした。何となく、ふんい気がかわっている。ユタ州ソルトレークシチーでのことだ。しばらく周囲を観察するうちに、その原因がわかってきた。まず第1に、酒をのんでいる人がいない。驚いたことに、男たちまでミルクをのんでいる。朝食ではない。夕食である。酒をのんでいるのは、ただひとり異国人の私だけ。注文したら持って来たのだから売らないわけではないのだ。いかにも道心堅固、といった感じで、がっしりした手でコップをつかみ、ミルクをがぶがぶのみながらの談笑。たばこも私だけだ。気がついてみると、子どもをまじえた家族連れが多い。さらに驚いたことに、デザートのあとコーヒーをだれも頼まず、水かジュースで切上げる。『あなたはコーヒーがほしいでしょうね』と給仕はわざわざ私に念を押した。健康優良児の給食のようだ。こんな食事の仕方は、欧米のどこでも見たことがなかった。」

**☆宣教師活動については**

「多くの米国の都会が、犯罪、人種問題、青少年非行など重苦しい悩みに押しつぶされているのにひきかえ、ここでは未来を信じている人々のひたむきな感じが一種のさわやかさを感じさせる」と述べ、さらに、

「会った人々が、きまってどこか2、3か国に住んでいたことがあり、それが宣教師として



ソルトレーク・シティー

派遣されたのだということも興味深かった。そうした意味では、ユタ州は他州にくらべて驚くほど〝国際感覚〟をもっている。

中流以上の人たちの国際知識は正確だし、日本を知る人も多かった」と説明し、こう結んでいる。

「ゆれる風俗と、何でも許されるという風潮と、社会構造の変化を促す産業発展の中で、開拓以来の厳格な自己規律を満々たる自信とともに保ちつづける地域がまだ米国に存在するということは、ガンサーが『各州の中でユタ州の特殊性は絶対』(『アメリカの内幕』)と特記したように、米国の多様性を印象づけるひとつの驚きである。」

**☆古都を救った恩人たち**

明治43年から2年間、日本伝道部長を務めたエルバート・D・トーマス長老は、後に上院議員の要職につき、日本を愛する政治家のひとりとして活躍した。雑誌「淡交」1970年9月号で、大久保傳蔵氏は、第二次世界大戦末期、原爆から京都、奈良を救った恩人として、トーマス議員を紹介している。

エルバート・トーマス

「私は京都、奈良をアメリカ空軍の攻撃から救うために、各方面に働きかけ、ついにこれに成功したのは二世のリーダー、マイク・正岡勝だったという秘話を知ることができた。二世である正岡はアメリカ人の名誉と功績に対して自分は沈黙を守っていたのだった。正岡は、アメリカ空軍の爆撃がはじまると世界に誇る文化をもつ京都、奈良を爆撃から救わねばならぬと決心してユタ州選出の上院議員エルバート・トーマスに熱心に陳情した。

トーマスは若き日、モルモン宗の伝道師として日本に来たことがあり、日本の事情にも精通し、アメリカ議会では日本語を解する唯一のアメリカ人だった。そのトーマスがユタ大学の教授のころ、正岡は優秀なる学生でもあった。

いわば師弟の親密なる間柄であった。そこで正岡の請いを容れたトーマスは直ちにグルー元駐日大使、ランドン・ウォーナー博士を呼び正岡を加えて「古都を救う会議」を開いた。幸いトーマスは上院の軍事委員長だったのでこのことを大統領に伝え京都、奈良の空襲禁止令を出して空軍に指令したのであった。善意の種子が実を結んだのであった。

いまやトーマスも、グルー元大使も、そしてウォーナー博士も故人となった。日本文化救済の恩人たち、ことにその主唱者たるマイク・正岡のかくれたる功績を今こそ高く評価しなければならない。」

# いよいよ
# 半年後に迫った
# 日本地域総大会

日本地域総大会準備委員会事務局

8月8、9、10日地域総大会が開かれる日本武道館（東京）

英国マンチェスター、中米メキシコ、西独ミュンヘン、北欧ストックホルムで開催されてきた地域総大会は、まもなく南米で開かれ、いよいよこの夏には、日本と韓国で開催される。1901年9月ヒーバー・J・グラントによって献納された日本の地に、スペンサー・W・キンボール大管長をはじめ、多くの予言者をお迎えし、主のみむねを聞く機会が準備されていることは、大いなる祝福であり、またとない歴史的出来事でもある。この意義をよく考え、多くの愛する人々と共に参加できるよう生活を整えていきたい。話される言葉を、みたまによって理解できる人になれるよう、自分自身を反省し、清めていきたい。主のみむねにかなう人に変わっていくことができるようつとめたい。過去、聖徒の道で紹介された予言者のお話を、静かに読みかえしてみることも忘れてはならない準備のひとつであろう。

1901年9月ヒーバ・J・グラント日本の地を献納する

「私たちは全世界の会員たちに、バプテスマのときに交わした誓約に忠実であるように、また、いついかなるときも、いかなる場所にあっても、たとえ死ぬまででも神の忠実な証人としての立場を守るように説いてきた。それは、人々が皆様方の良き行ないを見て天の父の栄光のもとに来る、すなわち、イエス・キリストの福音を受け入れるようになるからである。これは人々を救いに導く神の力である。

私たちが第一に望むところは、たとえ教会の本部からいかに離れた地に住まうとも、教会員は忘れられてはいないことを証明することである。教会幹部は皆様方について心から関心を抱いており、教会本部の近くに住まう会員たちに対すると同様の気持をもって皆様方のために働いているのである。」

——ハロルド・B・リー大管長——

「昨年のクリスマスに、大管長会より教会員に対して次のクリスマスメッセージが出されました。クリスマスの日は過ぎましたが、このメッセージは非常に大切ですので、本号に特別に掲載致します。」

# 大管長会のメッセージ

聖なるシーズンにあたり、救い主のみ言葉に深く思いを巡らしていただきたいと思います。
「あなたがたによく言っておく。わたしの兄弟であるこれらの最も小さい者のひとりにしたのは、すなわち、わたしにしたのである。」（マタイ25：40）
世界には空腹などで苦しんでいる人がたくさんいます。そしてこれからも一層ふえる可能性があります。皆さんの周囲の人々だけでなく、世界中の貧しい人々のことを心に留めて下さい。特に、次に挙げる教会の教えをよく守っていただきたいと思います。

1.毎月断食を守る　二食、飲食を断ち、それに相当する金額あるいはそれ以上を貧しい人々のために監督あるいは支部長に渡します。

2.家族の1年分の食糧貯蔵　何をどのようにして貯蔵するかよく調べ、無駄のないようにしなくてはなりません。

3.エネルギーの節約　これは1年前に一度発表されたことですが、自動車を使う場合は、できるだけ乗合いにし、規定の制限速度を守り、また家庭においても、電力や燃料の不必要な消費をなくすよう努めて下さい。

4.食べ物の無駄をなくす　食べ過ぎたり、食べ物を無駄にしたりしている人がたくさんいますが、空腹に苦しんでいる人もたくさんいることを忘れてはなりません。食べ物を大切にすることを子供に教えて下さい。

5.職場でも全力を尽くす　求められる以上のことをするよう努めて下さい。主はアダムに「汝は顔の汗によりて食物を食い、而して終に土に帰る」（モーセ4：25）と語っておられますが、これはアダムの子孫にも当てはまることです。仕事が与えられていることは祝福です。不平を言うことなく意欲的に励むよう努めて下さい。

6.健康に注意をする　適度な運動と休息を取るようにして下さい。知恵の言葉を守り、食事にも注意を払い、何でも過度に行なわないよう気をつけ、子供たちにも健康のよい習慣を教えて下さい。

7.家族を強くする　毎日家族そろって祈り、毎週家庭の夕べを開き、すべての律法をよく守るよう努力して下さい。

クリスマスはイエス・キリストを敬い尊ぶ時節ですが、平日以上に主の戒めを守ることによってのみ内からの力、幸福、平安が得られることを再確認する時ではないかと思います。

敬具
スペンサー・W・キンボール
N・エルドン・タナー
マリオン・G・ロムニー
大管長会

聖 徒 の 道

1975年2月20日発行（毎月1回20日発行）　第19巻第2号
昭和42年12月18日第3種郵便物認可